

メスガキお嬢様先生のわからせかた

低次元領域

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ざあこ、ざこ決闘者♥。手札とフィールドがスカスカ♥ ライフも風前の灯♥

サレンダーしちやえ♥ 年下だと思っていた女の子相手に何もできず負けていく気分ってどんななの？

えっ、トップ解決？ あっ、はい誘発札ありません。

あっあっあっ

1／27 題名を メスガキ先生↓メスガキお嬢様先生に変更しました。

・素敵な立ち絵を朱身つめ様に描いていただきました

SOLUTE 1：入学試験の解方

場所は日本国、とある山の上の建物。

普段ならば多くの人が世界的カードゲーム「デュエルモンスターズ」を楽しむ、いわゆるドームのような場所。

だが、だが今日に限ってはそうではない。

「ついに、ついにこの日がやってきたな……」

時は八月の後半。夏の熱さもピークを過ぎて、葉の色も緑から変化していく頃。

会場でただ一人、不敵に笑う男がいた。

通行の邪魔になっており横を通る同年代の者達から嫌味な視線を貰っているのにも全く気が付かないほど自分の領域に浸っているものが居た。

やたらイタイボロボロのコートをたなびかせ、自分に浸っている男がいた。

「デュエルアカデミア……その入学試験がな!!」

誰と話しているわけでもないのに大声で叫ぶはた迷惑な男だった。

腰からぶら下げたチェーンが通されたカードケース、40枚の己のデッキを大事そうに撫でるとまた「フツ」と笑いを零す。

もちろん道のと真ん中でだ。

……この男の擁護をするとするならば、まあ許してやってくれ。彼は人生で一番大切な瞬間を味わっているんだ……とフォローにならない言葉しか綴れない。

それほどに大事な試験、ここまで男の気分を高めるイベントであることは間違いない。

——デュエルアカデミア。

一般的な学問の外に文字通りデュエルを教える場所。大概が社会とは隔絶された場所に存在し、通う生徒は何から何までデュエル尽くしで鍛えられる。

例えばプロデュエリストになることが目的でなくても、デュエルモン

スターズが好きな子供なら一度は通つてみたいと考える夢の場所。

今日は全国に存在する中でも一番の格式を持つ本校高等部、その実技試験日なのだ。

ここに居るのは筆記試験を潜り抜けた猛者たちばかり。とうぜん、この男もその一人だ。

「筆記試験の成績は117番……いやまあ、テンションが上がり過ぎてて途中から回答欄がずれていたに違いない。俺の本来の実力なら一桁は確実だったはず……」

……ちなみに今回の受験者の数は120名であることは周知の事実である。

手にした試験票を握りしめ目に炎を燃やす男。とうとう周りの受験者たちがイラついてきたらしい、試験官へ苦情を入れようと動き出す者もいた。

だが男は気づかなかつた。

「い、いやそんなことはどうでもいい！」

この実技試験で試験官を倒し！ 実力を知らしめ！ 俺はデュエルキングとなる！ その伝説の始まりはこれからなのだから！」

「——おにいーさん♥」

彼の背中から声をかける、その女兒の存在に。

「ひよっ!? ……だっ、誰だ君は！」

自分の世界への侵入者に驚いた男、跳ね上がり汚い声を上げ通路の壁へとダイブした。

鈍い音を立て鼻を赤く染め上げた男。少しした後、誤魔化し声を荒げる。

「クスクス……人に名前を尋ねる時はまず自分から、って学校で習わなかつたの？ それにしてもそんな真っ赤にしちゃって、クリスマスはまだ先だよ？」

少女は真面目に答える気などない。壁に激突した男を笑い「サンタに置いてかれちゃつたの？」などと言葉を続ける。

男もかなり迷惑な人物ではあつたが、この女兒も面倒くさい人間と

認定して間違いないだろう。

「なっ、この！ 子供だからっていい気になりやがって……！」

そんな挑発を受けて腹が立たない器ではない。すぐに鼻以外も真っ赤に染まればその原料は恥と怒りだということは言うまでもない。

加えてさらに苛立ったのは、女兒がどう見ても年下だということ。身長は130超えてるかどうか。恐らくは日本人ではないのだから瞳の色と金髪のツインテール。

おおよそこの場にはふさわしくないオシヤレパーカー、膝、手の甲までも隠すかなり大きめのもの。

15歳である自分よりも二つ……いや三つは最低でも低いだろう女子。小学4年生辺りだろうか。

そんな見積もりの子供に好き放題言われたとあってはプライドに関わる。

だがその行動を見て女兒は追撃をかける。猫をモチーフにしたのであろうフードを深くかぶり防御してますと言わんばかりに顔を背ける。

当然、顔は笑っている。

「エー怖いーい♥ おにーさんってばこんな小さい子に怒っちゃって恥ずかしくないの？ それで伝説のデュエルキングになるだなんておつかしいんだあ！ アハハ♥」

心のこもっていない悲鳴はただ人を腹立たしくさせるだけである。

げん骨の一つでもくれてやろうかこのガキが……、男の怒りは限界にまで上り詰めようとしていた。

しかし周りの目があるし、なにより口で負けたからと言って暴力に出ることそれは人間として負けたも同然だ。

『——あーあー、てすてす、マイクテスト。……まもなく実技試験を開始します。受験番号120番から110番までの者は』

そこで水が差された。熱くなった男を冷まさせるスピーカーの音声。

早くいかなければ順番を飛ばされてしまうし、なにより呼ばれた時

にこない不真面目な受験生だと思われてしまう。

「そもそも今日は関係者以外立ち入り禁止の筈だ！ 俺はこれから試験があるんだ、ガキは早く家に帰って宿題でもやっつてろ！」

男はそう言うのと颯爽と走り出し女兒に言い捨て置いて行く。

会話バトルに最後言い放ち相手からの返答を聞かなければ、それは勝利にも等しい。

これは逃げではない。会話の不毛さに気が付き打ち切る賢いもの選択なのだ。そう男は自分に言い聞かせた。

……はたから見れば、女兒に言い負かされて涙目で試験に向かったようにしか見えなかったが。

ともかく、そんな男の後ろ姿を見て少女は

「……キャハッ♥」

また楽しそうに、口角を吊り上げた。



男は筆記の試験はズタボロだった。

だがそれは実技への自信の裏返しでもある。町内子供デュエル大会では何度も勝ち、周りからは「将来プロデュエリストになるんだよね」と言われるほどに。

男は当然だと思った。故にアカデミアの試験も簡単に突破できると思い込んでいた。

「……馬鹿な。何もできずに終わった……？」

自身の左腕にはめた機械、デュエルディスクから鳴ったブザーが耳に焼き付いて離れない。

Life Point、通称LPが0になったことを知らせたもの。つまり敗北の証。

モンスターもマジックもトラップも、数段上の世界を見せつけられ負けた。

井の中の蛙、ゲコゲーコ。頭の中で先ほどの女兒が笑っている気がする。

「アンタの実技はこれにておわり。結果はまたあとで郵送されるから」

そう言われて返事をしたかどうかとも覚えていない。

男は観客席に座り込んで、ずっと地面を見つめている。

急に未来も何もが見えなくなってしまったような絶望感。首が締まっていく錯覚すら覚え、これからどうすればいいという焦燥。

「——って感じだと思っただけとお、メデイっちどう思う♥?」

「叩き落した張本人にそう言われているトーハ、彼も気づかないでしょうネエ」

先ほど受験生を煽り散らかしていた女兒と、これまたキワまった……ガイコツのように骨ばった顔と似合わせ金髪おかつぱポニーテールの男性。二人は試験官たちの待機所と思われる場所でお茶をしばいていた。

骨張り男の名はクロノス・デ・メデイチ。デュエルアカデミアの実技担当最高責任者である。

この場において一番偉いのはクロノス。そんな彼をメデイっちと呼び捨てにする女兒がただものではないのは見て分かる。

「流石にあれはやりすぎの気もしましたーガ?」

「えー、だって魔知ガエルを並べただけだしー。モンスター破壊効果のカードとかろくにいれてないからああなるんではしょ」

・魔知ガエル：星2／水族／攻 100／守2000

このカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手は他のモンスターを攻撃対象に選択できない。

他略。

カエル系のカードってやたら強いわよね。

つまりこのカエルが二体いるだけで攻撃対象に選択できなくなり、

男は何もできずに負けた。

攻撃することしか考えていなかったが故の悲劇であった。

試験担当が先ほどの子供だと分かった男は仕返しとばかりに意気揚々とゴブリンやらなんやらを召喚していたが、突破できなくなるやどんどんとしおらしくなっていたのは中々に滑稽であった。

「あれはまあ落ちるとして、今年はいまいちパットしないわねえ……」
やがて興味を無くしたのか、パーカーの袖を振り回して遊ぶ女子。
それをみて領きかけた後、ピンときたらしくクロノスは眉をひそめた。

「そうデスーネ……去年どこぞのオコサマ試験官が、」自分のデツキ
”で実技試験をして暴れたせいかもしれないませーノ」

うぐつと女兒は動きは止まる。

男の言葉に周りの試験官たちも同調し頷いた。四面楚歌、逃げ道無し。

「……え、えーオコサマ試験官って誰のことー？ 私よくわかんない♥」

キヤハツと取り繕ってみるが空気は微風もなしに変わらず。

「……だ、だつてえ！ あ、あの時の受験生が『こんな子供に何が出来るんだ』なんて、だからその……少しぐらい年季の差をわからせようと……ちや、ちゃんと実技自体は勝ち負け拘らず採点しましたー！」
「初等部の設立でもするからその広告ですか？ 息子が帰つてずっと泣いています。労働法って知ってる？ などナード、多数のありがたい意見をいただきましたノーネ」

趨勢は火を見るより明らか。勝てない試合だ。クロノスはよほど溜まっている物があつたらしく、考える時間も無しにすらすと述べていく。

言えば言うほどに周りの試験官たちの領きも大きくなり言外に「調子に乗ってんじゃねえぞ」という怒りすらある気がしてきた。

これはいけない。反撃の手段を女兒は探そうにも何もない。

だが、だがここでメスガキに横風が突き刺さる。

会話を聞いていながらも業務の遂行を優先しようとした試験官の

一人が、マイクの電源を入れた。

『――受験番号10番から1番のものは指定の位置へお集まりください』

「……あつ！　そ、そそろそろまた実技試験の時間ね!!　受験生たちを待たせるなんていけないことだから、ええと、この試験用デッキ持ってデュエルしてくるわ!!」

脱兎のごとく。

普段なら「待ち人？　ははは、待たせるだけ待たせておけ」と巖流島戦法をとることすら厭わないものが心にもない事を言つて駆け出した。

盗人さながらのにトランクケースの中のデッキを抜き出して走っていく様は完全に逃亡者そのもの。

もつと言うなら先ほどの受験生よりも徹底した逃げっぷりである。

あまりの勢いにクロノスはぼかんと置き去りにされた。

しかし数秒後に意識を取り戻し、既に遠く小さくなっている彼女に對して声をかけた。

「あ、待ちなさあーい！　話はまだ終わってませーノ！　おこさま

先生――じゃなかった、Ms. ルナ――」



「――ルナ・ベルケット先生、ですよね」

「あれ？　私の名前を知ってるなんて……もしかしておにいーさんはファンか何かなのかな？　ルナ嬉しい♥」

ところ変わって言うか観客席からステージ移り、二人は相對していた。

15歳にしては逞しい体と太いもみあげが特徴的な男。彼はどうしてか目の前の試験官のことを知っているようである。

「ええ、噂はかねがね。こうして実技を担当して頂けるのは光栄です」

噂とはどの噂だとルナは一瞬考えたが、すぐさままた「外用」の顔に戻す。なんにせに褒められているのなら悪い気はしない。

それではとお返しばかりに男を褒めようとルナは大きく手と足を動かしてアピールする。

小さい体でそうすれば、なんともほほえましい光景に映るものだと理解しての行動だ。

「ありがとう♥ 流石は一番ってことなのかな!? 筆記試験では群を抜いて優秀だったおにいーさん。三沢くんはあくこのデュエルアカデミア、デュエル座学を担当するルナがお相手するね!」

「よろしくお願いします!」

男、三沢 大地は相手のペースを崩すことが多い子供ムーブも受け流し、精根整ったと言わんばかりの眼差しでルナを射抜く。

少しルナはそれに驚きつつ「これなら少しは退屈しないかもしれない」と思い受けて立つ。

「少しはルナのこと、楽しませてね♥」

三沢が左腕を振りかぶり、戻す勢いで前に突き出す。

ルナはパーカーのジッパーを一気に摩り下ろしはためかせ、パーカーの内側に備えてあったディスクを取り出す。

お互い既にデッキはディスクに刺さっている。

ならばもう、あの言葉を叫ぶしかない。

「デュエル
決闘!」

戦いの火蓋が今、切られた。

SOLUTE―2：入寮式の解法

「エンドフェイズ時、伏せていたカードをオープン。破壊輪！ アステカの石像を破壊し俺は300ポイントのダメージ、そしてその分をあなたにも与えます！」 LP：1600↓1300

「ぐっ……!？」 LP：1300↓1000

「そして俺のターンっドロ！ 手札から強欲な壺を発動、デッキからカードを二枚ドロ……。……これで準備は整いました。

トラップ発動！ 全弾発射、俺の手札全て……。6枚を墓地に送り、数×200ポイントのダメージを与える!!」

「ぎやあああ!？」 LP：1000↓200

「ありがとうございます！ 先生……。あの?」

「ううっ……。うがあー!! なんて、なんで勝てないのよここまできてえ！」

そもそもこのデッキ、バーンしたいのか強制戦闘でダメージ与えたのかどっち寄らず過ぎるのよお!! こんな、こんな……。あああ!!」

「え、えつとその……」

「三沢大地イ！ アンタの顔は覚えたからなあ！ 実技成績は満点つけといてあげるからさっさといなくなれえ!!」



涙塗れの入学試験の後の話。

あれから2週間ほどが経過し、実技試験を受かった者達は今日へりコプターにてここ、デュエルアカデミアへと輸送された。

いや船で送れよと思われるかもしれないが、入学するときぐらい綺

麗な景色を見せてやろうという学園の粋な計らいであるため、勿論学園から出る時は船だ。

入学式も無事終わり、今は皆与えられた寮へと集まっているだろう。

《拝啓、パパ&ママ。あと爺やお姉ちゃん。

いかがお過ごしでしょうか。

デュエルアカデミアで働き始めてはや二年が経とうとしています。三年前、家でグータラしていたからといっていきなり孤島の学園に簞巻きで送り込まれた時はどうしてやろうかと考えていた頃が遠い昔のように思えます。

去年は単に座学を教えるだけでしたが、今期からは副寮長としてライイエローを担当することとなりました。これもひとえに私の実力が素晴らしいからに違いありません。

少し前に校長、もといハゲから学園内でデュエルに挑まれて勝率が4割届くかどうかというのは教師としてどうなのかと言われましたが、大体デツキの相性が悪かったり手札が事故ったりするのが悪いだけで私は何も悪くないと反論したのが功を奏したのでしょうか。

きつと来年の今頃にはあのハゲ校長も私にペこぺこ頭を下げるようになるに違いありません。

それはそうと、今月分のお小遣いが――》

「お嬢様、お小遣いは一年間だけだと以前に言われておりましたが？」
「あれ冗談じゃなかったの……?!」

学園に三つある寮の一つ、小山に建つ大きなペンションタイプの建物。

「ライイエロー」のとある一室。

机に向かい書いていた手紙を握りつぶし、ルナは驚きの表情と共に同居者に尋ねた。

差し込む夕暮れとやや小さいテーブルライトに照らされ、汚れ一つない白のエプロンが輝く。

「ええ、あくまで学園での暮らしが安定するまでということ……今回このように、本来男子寮であるライイエローに部屋を工事してもら

い、無事に住まいも完成しましたから。それに、もう教師としてのお給金は十分に出ているはずですが」

ずいと一步前にできれば、暗さの中に隠れていた黒のワンピースが姿を現す。身長もそうだが体格においてもルナが勝っている点は何一つない。

頭には金で拵えられた月のバッジがホワイトブリムに添えられている。夕暮れを受け輝く姿はどこか誇らしげだ。

「……セファイ、一つ忘れていることがあるわ」

「なんででしょうか？ お嬢様が小さい頃からお世話してきましたこの私が忘れていたモノとは」

セファイと呼ばれたメイド。彼女は表情一つ変えずに首を少しかしげる。

人形のような、という訳ではなくその顔にはしつかりと「また何か言ったら」という呆れの感情が含まれている。

忠誠心というのが全く目に見えないのがこのメイドの特徴だ。

「——教師の給料じゃ、レアカードは買えないの」

そんなメイドに対し、主人としての威厳を見せようとしたのだろう。

かつこよさげにペンを構えてみたが、その中身は単なるレアカード大好きっ子。

ちなみにデュエルアカデミア本校の教師の給料は、新任であるルナでさえも一般的な教師のそれを上回っていることを記載しておく。

「はいはい、毎月二桁万円のお買い物大きな出費と思わないお嬢様には死活問題でしたね。これからは節約という言葉を思い出しただきますよ」

「いやーだー！ 今日だって本当ならホロレアのサクリファイスが手に入りそうだったのに！ 相場よりめっちゃくちや安かった掘り出し物があー！」

サクリファイス 儀式／レベル1／魔法使い族／攻・守 0・0

儀式魔法「イリュージョンの儀式」で降臨。

一・1ターンの一度相手のモンスターを一体対象として発動可能、

そのモンスターを装備カード扱いでこいつに装備（1枚まで）

攻撃、守備力は装備したモンスターの数値を参照。

二．こいつが戦闘破壊される時、装備モンスターを代わりに破壊する。

三．モンスター装備時、このモンスターの戦闘で自分が戦闘ダメージを受けた時、相手にも同じ分効果ダメージを与える。

中々にいやらしい効果。見た目きもいのが難。

「ちなみにおいくらだったんですか？」

「30万円。でも本来なら40は固いわよホロだし！ お金に困るよ
うなことがあって売ったとしても利益が出るわ！」

「どう考えても高いです。しかもお嬢様、カードは一枚たりとも渡し
たくない人間でしょう？ この部屋の八分の一はお嬢様が今まで集
めてきたレアカードですよ？ しかもお屋敷に置いてきたコレク
ションもありますし」

ちらりと部屋の片隅に目を向ければ、明るい格調の部屋に似つかわ
しくない重厚な金庫が2つ。部屋を占拠している。

一般生徒よりはるかに広いはずのこの部屋でも圧倒的存在感。例
え火事で建物が全焼したとしても内部に全くダメージがいかないと
評判の品だ。

せいぜいこれがあることで部屋が狭まり、掃除がやや楽になる程度
のことしかメイドに利点はない。

「しかもお嬢様、普段使いのデッキはもう決まっていますあの中身大概
使わないでしように」

「別にいいじゃないセフィ。疲れた日とかにあの宝の山を眺めるだけ
でこころが豊かになるってものよ。いつかレアカードに囲まれて一
日を過ごしてみたいわ」

札東風呂ならぬレアカード風呂を想像したセフィ。

今までやったことは無い筈だが、そのうちにやりかねないだろうと
思うとさつさとどうにかしなければ、強く志す。

謎の奮起を感じ取ったのかそうでないのか、怪訝な顔をしてルナは

反撃に打って出た。

「だいたい、セフィだって——」

「おおっとそろそろ入寮式の準備をしなくてはならない時間ですわね。ささっ、お嬢様お仕事ですよ」

だがセフィの一枚上手であった。仕掛けてあったかのようになり響く腕時計のアラーム。

慌ててルナが壁掛け時計を見れば時刻は六時。早くいかなければ赴任早々仕事をさぼる教師の誕生である。

いいや、実のところそれだけではない。ルナにはこの入寮式で企んでいることが一つあったのだ。

だからこそ入寮式は滞りなく進めようと考えており……つまりところ言い争いをしている場合ではないのだ。

「ああーもうっ！ 分かったわよ、けどレアカードを諦めないわよ私は！」

何の宣言だ。メイドは心の内でそう思った。

「何の宣言ですか」

「なによやる気!!? いいわよ受けて——」



入寮式は無事に幕を開ける。

ロブスターや子豚の丸焼きといった普段お目にかかれない料理がロングテーブル、真っ白なカバーの上に大皿で並ぶ。

窓から見える月明りで照らされる学園が何とも幻想的だ。

「えーそれでは今期のライイエローの寮長、樺山の紹介はこれにて。次は副寮長である……ルナ・ベルケット先生から」

「はあ〜い♥」

激しい言い争い（主にルナしかダメージを受けていなかった）を終

えてルナもなんとかその場にいた。傷つけられたメンタルもそれなりに豪華（ルナ視点）なご飯の前では癒されるというもの。

食堂に集められたライイエローの生徒達が一挙に彼女へと視線を向ける。黄色の学生服で統一されているせいかどうかどうにも目が落ち着かない。

傍で控えているメイドからカンペを渡されるがそれを無視し、ルナは壇上へと登っていく。

「……なるべく普通に頼みますよ」

「任せてって樺山寮長♥」

ちよび髭がトレードマーク。くたびれてはいるが優しそうなおじさん、樺山からマイクを受け取るとルナは壇上でくるりと一回。

パーカーを浮かせ、普段は隠れているショートパンツを敢えて見せつける。恐らくはお色気のもりなのだろう。

……だが見た目が低年齢過ぎて、マセた子供にしか見えないので何の意味もない。

「……小学生？」

「ほらあの先生って……」

このように間近にいた生徒ですら何故こんな子供がいるのかわからないと困惑の表情を浮かべている。

ルナは反応が気に食わず一瞬血管が浮き出ようとしたが、流石にいきなり怒るのはまずいと根性でひっこめた。

「初めましての人は初めましてー！ アカデミアの天才美少女教師、ルナ・ベルケット副寮長です。気軽にルナ先生とかベル先生って呼んでね！ よろしくう♥」

キャピツとポーズを決めて気分はアイドルか。しばしした後起こるまばらな拍手がものさみしさを物語る。

ルナの視界端でメイドが口元を手で抑え笑いを堪えているのがよく見えた。

「……ちなみに年齢は24歳、好きなタイプはあかつこよくてデュエルが強い人♥ と言っても私はすごい強いから、皆も頑張って強くなつてね！」

「24? 何進数での話だ……?」

「仮に24でも美少女ではないよな……」

「俺、保健の鮎川先生の方が美しいと思う」

評価は散々だ。少なくとも威厳というのは既に地に落ちている。

女兒の肩がプルプルと震え始めたが、羞恥によるものか怒りによるものかはメイドにしか見分けがつかない。なお後者である。

「……………」、今回みんなは筆記、実技試験で優秀な成績を取ってイエローに来た子。中等部からの在籍しててイエローに来た子。色々いると思うけどおくブルーに負けないぐらい強く鍛えてあげる♥」

ややムカついたのか「中等部に在籍しながらブルーに行けなかったやつら」とルナは言外に口にした。

事実、編入組ではない者たちはそれが面白くなかったようだ。

「でもあの先生、実技試験で三沢に負けてたよな」

「お、おいやめとけて」

ラーイエロー一年代表として最前列にいた三沢。そしてその隣にいた編入組の生徒の会話。

聞き洩らすはずがなかった。

「あああんっ!? 今なんて言ったのかなあ!? かなかなっつ!!」

胸倉をつかみかねない剣幕でルナは詰め寄る。顔だけは笑顔。声にどす黒い怒りをにじませ、三沢の横にいた生徒を責める。

巻き添えを喰らい三沢も引いている。樺山寮長などはほれ見た事かと頭を抱えた。

「だ、だってベル先生……あんな自信満々にしておいて」

「あんなのはあ! 試験だし!! 私デツキ使えば勝ってたしい! 私がこの学園の教師の中で一番だから!!」

しかし生徒も負けていない。ここで下がれば自分がいい負けたと認めるようなもの。

三沢とのデュエル中、「ふふーん、まだまだね♥」や「ここまで私の想定通り♥」と大口叩いていたことを引き合いに出す。

ルナも負けていない。試験用デツキなんてろくなもんでもないと学園側の不備だと熱弁する。

実質負けだろこれ。

「え、でも一番は実技指導最高責任者のクロノス先生じゃ……」

「はあーっ!! 試験時間ギリギリに来た110番が気に食わなくて実技試験に自分のデツキ使って、しかも無様に負けたクロノスが私より強いわけない!?!」

突然のDisが今頃ブルー寮で歓迎会をしているクロノスに突き刺さる。そしてそのクロノスを倒した生徒はレッド寮でくしやみをしていた。

こんなことを言ったらクロノスに知られたらまた文句も言われるだろうが知ったことではないとルナは熱く語る。

「なんならこの場で全員相手にして——」

「お嬢様、お嬢様。それぐらいにしておいてくださいませ」

パーカーからデュエルディスクを取り出そうとした時、ブレーキがかかった。いつのまにか隣に来ていたセフィがその腕を止める。

樺山は教師用の席でアワアワしていた。

「だ、だってこの生徒が生意気なことをねセフィ」

「盛んなことは大いに結構ではないですか。それだけお嬢様の……野望にも役立つと言うものです」

よく見ればまだメイドは笑いの感情が押し殺せていないが、怒りに振り切れているルナが気が付くことは無い。

セフィの言葉を受けるとチョロいもので、「そうかな」「そうかも」「そうね」とフェーズを重ね落ち着いた。

この一場面により、メイドが「子供教師の制御役」と一瞬でイエロー生徒に認識されたの言うまでもない。

「……野望?」

そんな中、どうしようか混乱していた三沢はメイドの発言を聞き洩らすことは無かった。

不穏な単語。もう一度口に出せば他の生徒も聞き流していたことに気が付いたのかざわつきだす。

当然、樺山寮長は「何の話? ねえ何の話?」と目で訴えかけている。憐れ。

「そう、そう！ そうなのよ三沢っち！ よく聞きなさいライイエロー諸君。このルナ・ベルケッツには一つ、ある野望があるの！」
当初予定した流れと違うがもういいだろう。すっかりぶりっ子の仮面を脱ぎ捨て、マイクを片手に説く。

メイドは軌道修正したのなら用はないとばかりに奥へと引っ込んでしまう。おかげで生徒にはまた緊張感が漂った。

「みんな——オベリスクブルーが一番格上の寮って、なんだか気に食わないと思わない？」

案の定。とんでもないことを言い出したルナに樺山はもう顔面蒼白だ。

生徒、特に中等部組はブルーの偉さというのを理解しているために言葉を失っている。その二つの慌てようから、編入組も何となくヤバい事を言っているのだと気が付く。

三沢はそのまま壇上に引き上げられ、先ほどよりも更に困惑している。

「そもそも、寮の頭についているオシリス、オベリスク、ラー。これはかつて伝説のデュエリスト武藤 遊戯のデュエルに関わってきた強力なカードたち。三幻神から取られているのは知ってるわよね？」

「え、ええ……そしてこのアカデミアのオーナーであり武藤遊戯のライバル海馬 瀬人。彼が使ったのがオベリスクの巨神兵だ……」

三沢は急に振られたがそこは優等生。しっかりと正しい知識を披露する。海馬の名前にルナが顔を歪めるが、そのまま話を進めた。

神のカード。かつて古代エジプトから始まった物語を象徴するカードたち。レアカード大好きなルナがその詳細を知らないはずがない。

「そう、残り二柱はオシリスの天空竜、ラーの翼神竜。でも実はね、この三幻神にはヒエラルキーが存在するのよ

ラーの翼神竜、うちの寮のシンボルでもある彼こそが一番！ それだつてのに……なんでライイエロー寮が二番に設置されているのか！

だから私は考えた、この寮を一番にのし上げようと!! セファイ

！」

「はい、ハハハ」

そこまで言うのと、メイドがまたいきなり現れる。丸めた横断幕を両手に音もなく。

あまりに唐突過ぎて近くにいた生徒は声を出して驚いた。

壇上にのぼり端っこを主人に持たせると、勢いよく飛び退いて幕を広げる。

すれば当然、幕に書かれた文字が読める。

だがそれを一番間近で見っていた三沢は、あまりの意味の解らなさに何も考えずただ読み上げることしかできなかった。

「めざせ！ ラーゴールド計画」……？」

「そう！ この黄色だらけの寮を金ぴかに染め上げ！ オベリスクブルーなど足下に及ばない程の寮を作り上げる！ このベルケツト家次にふさわしいものをね！！」

今日から皆には授業のものはまた違う課題を出していくわ。それをクリアして行けば自ずといいデュエリストになるようにね！」

もう樺山は、意識を失っていた。

心細いが色々と気が利く先生には荷が重すぎたのだ。

「じゃあ早速今日の問題を出すわ、名付けて【モンスターの通常召喚】！」

しかし、それに副寮長が気が付くことは無かった。

夜は更けていく。いつか辿り着く、黄金の輝きを求めて。

いつだって、デュエルというのは真剣なものとは限らない。時にはお遊びでだつて楽しむ。勝つても負けても楽しい。

カードに描かれているモンスターや一場面を切り取った魔法罫を見事に再現する超技術「ソリッドビジョン」の導入により、見ているだけでも楽しい。

それが今日、カードゲームでありながらも世界的娯楽となった魅力の一つだろう。

「え、えーと俺は切り込み隊長を通常召喚、その効果で手札からレベル4以下モンスター……岩石の巨兵を特殊召喚！」

おどおどしながらゆっくりとカードをディスクに置いていくその姿に反し、彼の目の前には勇敢なるモンスターたちが召喚される。

歴戦の勇士であり目の下の傷が武勲を物語る騎士。そんな彼の二倍以上の巨躯を持ち、剣や矢など通さないと言わんばかりの体を持つ石の魔物。

上がる土煙が彼らの推参を演出する。

匂いなどは流石に難しい……が、動作一つで擦れる金属鎧。揺れる地面などが映像そして音で再現されている。本物かと見間違ふほどの完成度だ。

切り込み隊長 効果／レベル3／戦士族／攻・守 1200・400

一・通常召喚に成功した時に発動可能。

手札からレベル4以下モンスターを1体特殊召喚。

二・モンスターゾーンにこのカードがある限り、相手は他の戦士族モンスターを攻撃対象に選択できない。

どっちも優秀な効果を持つ素晴らしいカード。これでレア度が高ければ言うことなし！

「そして伏せカードの装備魔法、ドープリングを発動！ 岩石の巨兵に装備。これで攻撃力は1300から2000に！」

空に現れたる薬瓶。ひとりでに逆さになるとそのまま岩石の巨兵に降りかかった。何ともシュールな光景だが目に見えて岩石がイキイキとし出すのが分かる。

鉱物好きにとってはなかなかたまらない光景かもしれない。知らないけれど。

「バトルだ！ 岩石の巨兵でセットモンスターを攻撃！ 切り込み隊長も続けえ!!」

裏守備。未だカードの裏面しか姿を見せないモンスターに対して巨岩の一撃が降りかかる。

彼はセットモンスターの本来の守備力が1600、発動されている相手の「カオスシールド」により1900まで上昇することも知っている。

攻撃力が守備力を上回れば破壊可能。がら空きになったフィールドを切り込み隊長が駆け抜ける。

「さあどうだベルケット先生！ これで俺の勝ちだ！」

「——ふふん……ざあこ♥」

そのはず、だった。

窮地に追いやったと思っている先生はフードの袖で頬を隠し、口角が上がりむき出しになった八重歯をぎらつかせる。

畏に引つかかってくれてありがとう。そう生徒に対し伝えていた。

「セットモンスターは異次元の女戦士！ 戦闘を行ったダメージ計算の後、相手モンスターと一緒にゲームから除外できちゃうの♥」

「ええっ!? それじゃ」

「へへーんだ、可愛い女の子には棘があるって教えてもらわなかったの？ それじゃ岩石の巨兵くんはじよが〜い♥」

カードの裏面に岩石の剣が突き刺さる。

やがて裏面が割れたかと思えば、鎧を着た女剣士が岩の体にしがみついているではないか。

振りほどこうとしてももう遅い。突如として黒い穴が開いたかと思えば二体ともその空間に飲み込まれてしまった。

「う……で、でもまだ切り込み隊長が」

「おまぬげさん♪ 岩石の巨兵自体は除外だけど……装備されたカードは対象がいなくなったことで墓地に送られる。こんな簡単なことも忘れちゃうなんて」

言葉と共にカラになり転がっていた薬瓶が割れる。

それを合図に、ルナの隣で発動されていた赤紫色のカードが怪しく光り、カードの絵柄からゴーストたちが現れる。

青白く透き通った体、この世への未練怨念を微塵も隠さない恨みの顔。生者を呪い、落ちるものを嘲笑い仲間にする者達。

愚か者を引きずりこもうと生徒へと迫る。

「あ」

「永続罨、死霊の誘いの効果。お勉強が足りないメガネくんは300ポイントのダメージ♥」

「うわあああー」LP:100→200

ゴーストが生徒の体を突き抜けた。それだけで体の力が一気に抜ける気がして、生徒は膝をつく。

青き尊き制服に埃をつける敗北。悔しさがあふれ出る。

一部始終を教室の片隅で眺めていたメイドは後に語る。

思い通りに行ったからって生徒が間違えたのを心底喜ぶのは先生としてどうなんだろう、と。

「メガネかけててブルー寮の癖して勉強も出来ないの♥？ モンスタアの効果、異次元の女戦士の効果一つ覚えてないなんて落第してもおかしくないね〜ざあこ♥ ざこデユエリスト♥」

宿題増やしておくから覚悟しておいてね♥」

有頂天になり小躍りするまでする主人を見つつ、メイドは一人お茶を嗜んでいた。



「切り込み隊長で一刀両断侍を特殊召喚。ドールピングを切り込み隊長に装備、一刀両断侍で裏守備の異次元の女戦士を攻撃。」

一刀両断侍の特殊効果を発動、裏守備モンスターを攻撃した時、ダメージ計算無しで破壊！ 死霊の誘いの効果であなたに300ポイントのダメージ。攻撃力1900となった切り込み隊長で直接攻撃ダイレクトアタック！」

「ぐわああああ!! ドールピングはいらないでしょおお!!」LP:50
0↓200↓1700

だから生徒にわざわざダメージ上乗せで殴られるんだぞ。メイドは心の底で思った。

おおーという周りの感嘆の声がやや上がる。中にはこんな退屈な問題でなにを、と片肘を突いて見ているものもいるが……それはそうとモンスターが流れるように動くところは見ていて楽しいのだろう。やや前のめりになっているのを隠しきれていない。

「はいっ、はいおしまい！ お、おめでとう三沢っち！ 流石にこの程度の問題は簡単すぎたようね!!」

「ええ、通常召喚という題名に騙されずにカードを選ぶ、というのにやや手間取りましたが」

教室の中で賞賛を受け取りながらカードを教師に返す三沢。確かにこの問題はラーイエロー、もといラーゴールドトップの実力者には優しすぎる。

……だが、今回の狙いはそちらではないのだ。ルナは改めて教室にずらり並ぶ生徒たちの顔を見る。

自分も授業中にカードが触りたかったと残念そうに目を輝かせる者、簡単すぎるといふ文間に間違ったのが恥ずかしくなり俯く者、ルナのことを見定めるかのように見下ろす多くの強者たち。

「(ブルーのトップは、万丈目グループの三男、万丈目 準。そして女子の象徴に早くもなりつつある天上院 明日香。レッドでは、クロノスを倒した遊城 十代。この三人をいかにうちに引き込めるかってところかしら)」

既に台頭しつつある各寮の実力者たちの反応は大事である。

ブルーの二人組はやや退屈そうにしているためまだ厳しいが……レッドの遊城はカードを使った授業に喜んでるようにルナには見えた。

これならば彼を引き込むことも容易だろう。鼻息を荒くする。

さて、時間はお昼前。

アカデミアの中に複数ある教室の一つ。100人近くは収容可能、階段状に並ぶ机にはたくさんの生徒達が腰かけていた。

最前列にはイエローの生徒が。中段にはオシリスレッド。上段の一番遠い席にオベリスクブルー。

当然イエロが一番前にいるのは、この教師の差し金……というより「私の授業の席は早い者勝ちだけど、わかっているな？」との脅しのおかげだ。

「……ブルーでも……特に女子組は結構間違えたわねこれ。大丈夫かしらこの学園」

この学園ではオベリスクブルーこそが最高位の生徒達の筈だが、女子組においてはそうではない。

入学当初の振り分けでは、

中等部からのエスカレーター組は上位がブルーへ、下位がイエローへ。

編入組は上位がイエロー。しかし下位は一番下のレッド行き。

だがここに一つ、例外が存在する。それは「女性」という性別の問題だ。

女子だけはその実力に関係なくオベリスクブルーへと配属される。その理由は「ブルー以外に女子用の寮がない」というものだが……これはいけない。そんな境遇でも学園では最高位のブルーだ。

実力のない女子はブルーの中での地位は低いものの、そのストレスからか他寮相手に強気に出ることはままある。それが下の者の心意気を腐らせる。

だからこそ、だからこそ、

「(やっぱりラーゴールドこそが、この学園で一番になる資格があるわ

!!」

そこで私欲に走らなければいい事を言っているはずなのだが……。
ゴールド寮建て替えの際には校長に掛け合い、女子用の部屋も用意しておこう。そうすることで二つの寮に女子が置き実力とヒエラルキーの矛盾がやや解消されるはずだ。

拳を握りしめ思う。

……そのためには、こんな問題を間違えてしまうような生徒達をどうにかしなければならぬのだが。

「……カード効果が分からないなあーって時とかは、そのカードを持つてる人を探して交流したりい、図書室にカード名鑑があるからそれを借りたりするのも大事だよ♪

まあアカデミアに来てるようなおにいーさん達はそんなこと、言われないでもやっていたはずだよね♥？」

次回からの取り組み方のヒントを出しつつ考える。

確かにモンスターの効果などはわざと伏せてはいたが、名前はしっかりと明記していた。それなのにこのありさまか。

自分の掲げる目標が意外と達成可能なのではないかという余裕と、逆にラーゴールドでも間違えたものが多くいたという事実には頭を悩ませる。

「えーと、ルナの授業はこんな感じにー結構詰めデユエルやらの問題を記述のプリントで、そしてそれを元に実技で答えさせまーす♪

し・か・も、今回の問題は前日にラー寮には出していたんだけどお……授業課題とは別にラーの子たちには出す予定なの♥ もっとやりたい、もっと解きたいって子たちは是非ともうちの寮を目指してねえ♥」

露骨な生徒びいきである。大丈夫かこの教師。

その面倒くささにラーゴールドの生徒達も含め、大半が嫌そうな顔をする。だがそれを見てルナは怒ることもなく笑顔の下でぐふふと笑う。

どうやら今回はその反応はお見通しだったようだ。やる気のない生徒達に上を目指させるのがいい教師と言うものである。

「……セファイ」

右手を開き空に向け名を呼ぶ。その行為をするだけで注目が集まる。

数瞬の間が開き、メイドが巻物をルナの掌に置いた。

「はいここに。生徒の皆様こんにちは。わたくしはお嬢様のメイドをしております、リゼ・セファイともうします。ちなみにフランスの生まれで——」

「自己紹介とかいいから——」

用は済んだから帰れとばかりにしつしつと手で示すとメイドは一度お辞儀した後いなくなる。その後姿に「ああ……」と残念がる男子生徒がいたためルナは冷や汗をかく。

このままではお子様の面倒を見る素敵なメイドさんなんて評価がついてしまうと。

すでに手遅れであるとは知らず、ルナは巻物を広げる。

「授業時には希望者に問題を解いてもらうんだけどお……なんとなく！ 一番に正解した子には、ご褒美をあげちゃう♥」

もので釣るのは果たして立派な教師と言えるのか??? 生徒の半数が思った。

残りの生徒は授業で褒美？ せいぜい成績に少しプラスされるくらいでしょと舐めていた。

「——その詰めデュエルで使用したカードの中から好きなのを一枚プレゼントするわ」

「うおおおおおお!!」

会場が沸いた。具体的に言えば隣の教室にいた人たちが怯え、校長室に居たはずの鮫島校長さえ地震かな？ と誤解するほどに。

元々カードを多く持たぬレッドの生徒は大いに喜び、他の生徒達の二倍チャンスがあるイエローの生徒も奮い、ブルーでは下位に属する者達も思わず声を上げた。

この学園においてカードは財産だ。それが貰えると知れば盛り上がらない訳がない。

「……よっし」

メイドはひそかにガッツポーズを取っていた。

レアカードが買わずに嘆く主人に対し、なにが入っているのか分からない通常のカードパックならば一定数までと提案。

それではノーマルや低レア。更には当たってもあまり嬉しくないタイプのレアカードが余るじゃないという反論には「そっちは生徒にプレゼントしましょう」「生徒からの好感度がうなぎのぼりですよ」「そのうち皆あなたのことを慕いますよ」と唆した。

それってカードの切れ目が縁の切れ目になるだけじゃないか？

ルナは気が付くことは無かった。

この素晴らしい悪魔的発想により、余らせてたいしていらぬカードたちは褒美として。

それ以外のノーマルや微妙なカードたちは今日からラー寮で「使わないカード入れ」が設置され、投函。多くのラー生徒たちがその恩恵に預かれるようになる。

これの設置により生徒のカードプールの充実を図るのが狙いである。

聖人かと思わせる程の偉業。

それが言い争いの成果だという事を知っているのは彼女だけである。

興奮冷めやらぬ会場の中、三沢が自分にはその権利があるのだと気が付く。自分の顎辺りまで軽く手を上げ恐る恐る質問した。

「……えっと、じゃあ俺は……異次元の女戦士を」

「いいよ♪ これはスーパーレアだけど……流石に20枚もいらぬもん♥」

今回は金庫から取り出した一枚だったが、彼女にとっては「たくさんあってさすがに飽きる程のレアカード」と「生徒達から喜ばれ慕われる」ことを天秤にかけた時には後者に傾く程度のもの。

ルナも何の気なしにカードの束から一枚抜き出し三沢へ投げた。

受け取って確認してみるが、確かに絵柄が光り輝いている。スーパーレア、それも本物だ。

スーパーレアカードが、問題一枚解くだけで手渡された。

その光景が更に会場をヒートアップさせる。これからの問題にはどんなレアカードが出るのだろうか。そう思うだけで興奮が止まらない。

「……な、なんか予想より盛り上がっちゃったわね」

流石にここまでくるとルナ自身も引き始める。

何事かと見に来た生徒たちが困惑の表情になっているのが教室の外に見える。

「……お嬢様、自分で言いだしておいて何ですが」

「なによ」

「……これ、大問題になったりしませんかね？」

私はかわいいから大丈夫ですよ。

そんなジョークすら飛ばせず、ルナも押し黙った。

お金じゃなきやセーフでしょ。ルナは思っていた。

このあと校長からバチクソ叱られることになるとはまだ知らない。

「ノノノーネ……なんて恐ろしい事を。でも、おかげで遊城十代は教室に釘付けにできるノーネ」

とある復讐を成すべく、計画を企てていたクロノス教諭。

彼が他の野次馬の生徒達に押しつぶされながら笑っていたことも知らない。

本日の騒ぎは、これだけではおさまらないようだった。

SOLUTE—3：覗き確保の解法 2 / 2

『バイトロンでプレイヤーに直接攻撃！ はいこれでアンタもオ・ワ・リ♪』

『そうはさせるかつ、罫カード戦線復帰を発動！ 墓地にいる……守備力3000の千年の盾を蘇生して』

『はあい残念！ 不正解。そこで選ぶべきは戦闘ダメージを回復に変えるマツスラーちゃんでしたあゝ！ じゃないと陵墓、ジークのライフコスト効果が使えないでしょ？』

そんなのもわからないなんてよわよわ♡ えへへっ、追加課題の刑でえーす♡』

「——ですから、いくらなんでも生徒にカードを報酬として課題に取り組んでもらうというのは……」

「(つて感じになるかしら……ぐふふ。あーでも戦線復帰と衛生兵マツスラーは最近出た、どっちも出回ってる数が少ないカード。ちよつと難しすぎるわね)」

お昼も過ぎて校長室。

呼び出しを喰らったルナはお説教もなんのその。適当にうなずいては頭の中で次の課題を考えていた。

最近作られるカードはノーマルでも効果はいいものが多い。だがしかし、その代わりか極端に刷られる数も少ない。それを他人に上げてもいいと思えるのは、ひとえにこの女兒がレアカードに目がないカードコレクターだからこそと言える。

もしくはこいつが買い占めているせいだ。

「聞いているのですかルナちゃん？ 確かに不要なカードを交換できるような場所を設置するという提案はともいいものですが」

「はいはいわかりましたー、以後きをつけますう。でも言い出したことは取り下げられないので詰めデュエルの報酬はあげますうー」

拗ねた子供ここにあり。アカデミア校長である鮫島の前でもその態度を崩さず……どころか普段よりも悪い。

しかし校長も彼女に対してはどこか、職場の部下といった態度。ど

うやらこの二人にはアカデミア以外のつながりがあるらしい。

「でもお♥ 優秀な生徒が私のカードで更に優秀になるってのはおハゲ校長の望むところでしよう？ なんならもつと学園は優秀な子にカードを上げるべきだと思うんだけど」

「確かにそうですが、そのチャンスが二倍あるのがイエローだけというのが……せめて」

つるぴかりと輝く頭部の蔑称を口にしても少しも動揺しない辺り、もう慣れたものらしい。

傍目から見れば叔父と孫娘といったところだ。

だからだろうか、おハゲ校長は警戒が緩んでおりルナに対して切り口を見せてしまった。

通常の課題は三寮すべからくあるのにそれを口にするという事は。強者をより強くという学園の意向を合わせて考えればその先がすぐ分かる。

「……それ、仮にブルーだけだったらよかつたってことお？」

「それは……」

自分でも教育者としてやや不味い考えを口にしようとしていたことに気が付くと鮫島は口を紡ぐ。

本来ならば上を目指すために置かれたブルーの特権。それがいつのまにやら「ブルーだから優遇されて当然」と意識のズレが生じている。

「でもいやっ。イエローとかレッドの生徒達ならともかく、元々レアカードを手に入れやすい身分のブルーにあげたってあんまり意味ないし。あ、でもカードの交換ボックスみたいなアイディアは別にパクってでもいいわよ」

まあ碌なカードもないレッド、プライドが高いブルーじゃあまり機能しないだろうけど。心の内で女兒は零した。

事実イエローでさえも掃除を終えた顔のメイドが大量にカードを投入する、そんな光景を見せなければ活発になる可能性は低いだろう。普通人間というのはカードをあまり他人に渡したくない生き物なのだ。たとえ自分が使わなくとも、

この学園では全員がライバル。誰かにあげるといふ事はその誰かを強くしてしまうこと。自分に益がない限りそうそうしない行為だ。「……分かりました。ですがこれから生徒にカードを報酬として渡すようなことを始めるのであれば、事前に報告は下さい」

「うんっ、わかったあ♪」

女兒は確実にわかっていない顔を浮かべて返事をした。フードの袖を振り回しじゃあねと告げると彼女は校長室を後にしようとする。へたくそなスキップでひよこひよここと動くツインテールは別の生き物の如く。

「……」

その後ろ姿を見て、校長は困った子だと口元を笑わせる。

思うところがあつたのだろう、やや遠い目になって……

「あつそうダルナちゃん。」例の件”ですが」

「……？ あ、あれ？ そういや頼んでたっけ」

世間話を思いついたように彼は切り出した。



時刻は午後8時を過ぎた。既に日は沈み月明りと建物の中の光が湖を照らす。

ここは湖畔に位置する寮。学園で最大の権威を持つ生徒達の住処、オベリスクブルー。

「ふふふのふ、準備はばっちりなノーネ」

の、女子寮のはずなのだが……どうしてかそこにクロノスはいた。彼はイヤリングを付けていたり肌に気を使ったりはしているが勿論男である。

しかも怪しい事の子の上ない言わんばかりの格好。顔だけしか出

ないラバースーツ。これでは真正面から見ない限り彼がクロノス教諭であるとは誰も気が付けないだろう。

更にその手には彼の身長の半分はあるのではないかというニツパー。どんなに分厚い鎖だつて断ち切つてやろうという気概が感じられる。

「靴箱に仕掛けられたこのワターシ特製のラブレター。あれでM.S.天上院から告白されると思ひ込んだ遊城ドロップアウトボーイ。十代を女子寮の裏に誘ひ込む。

本来なら鎖がかかつて夜間は開いてない筈の裏口は親切なだけに切斷されていた。

……そして女子寮の裏、お風呂場の近くに迷い込んだドロップアウトボーイをこのカメラでパシャリ。完ぺきな作戦なノーネー！」

まごう事なき不審者。それどころか辱めに合わせてくれたと生徒一人を学園から追い出そうとしている。

イエローの副察長があれで、ブルーの寮長兼実技指導最高責任者がこれだ。この学園の未来は暗い。

「なーにが勉強できなくともデュエルに強い奴はいるですーか。しかも私にまぐれで勝つたことを引き合いに……絶対に許さないーノー！」

以前誰かをオコサマ教師と評していた人物とは思えない程子供だった。

伊達にプライド、貴族意識を持つブルーの寮長はしていないという事だろうか。

——なお、彼が知る由もないが……その仕掛けたラブレターというのは十代が靴箱を間違えて使用したことにより、彼の舎弟である丸藤 翔に渡っている。

少ししたあとやってくるのは彼であるし、肝心の十代は呑気に風呂に入っていた。

「さてさてそろそろ約束の時間ですし、この鎖をパチンとな……」

そうとも知らず、クロノス教諭はニツパーの刃を鎖に当てた。

『侵入者ヲ検知シマシタ』

もう一つ、彼の計画外のことにも気が付かずに。

「ウーップス!? ——アババババ!!」

突如として体に流れ走る電流。体が震え痺れあがり思わずニツパーを手放して後ずさりをする。

だがそれも罨、慌てて下げた足が「カチリッ」と何かを踏む音を立てたのと、地面から突如として縄が浮き出て彼を捕らえるのはほぼ同時だった。

「マンマミーア!? どうなっているのですーカ!?!」

突然の連続、縄の隙間に足が引つ掛かり身動きも取れなくなったクロノス教諭の叫びが女子寮に響く。

あまりのこととはいえ人知れず行動しなければならなかった彼にとつて致命的なそれが、更に状況を悪化させる。

「ちよつ、ちよつと一体何の騒ぎ!?! ってええつ! クロノス先生!?!」

「あ、アワワワのワ……鮎川先生!?!」

こちらは教師のかがみ。保険体育を担当する教師でありブルー寮の女子寮長の鮎川エミ先生が駆けつけてきてしまったのだ。

当然クロノスは相変わらずの不審者モード。弁論の予知もない事は彼自身が一番よく分かっているだろう。

そうこうしていれば鮎川先生の声につられ女子寮の生徒達が駆け寄ってきているのが見える。

「(ま、不味いノーネ! クロノス・デ・メデイチ最大のピーンチ!?!)」
しかも生徒達の中にはひときわ目立つ女性、天上院明日香さえもいる。つまり女子寮の事実上リーダー格が二人そろいぶむという事。

足元にはデカすぎるニツパーが転がっているし、懐には十代を撮る気だったカメラもある。

例え十代を嵌めようとしていたことがバレても、そうでなくとも教師生命は終わったも同然である。人を呪わば穴二つ。先人の言葉がこれほどに刺さると思っていもなかったクロノスであった。

「そ、そんな……クロノス先生がまさかので——」

「おつかれえーメデイっち!!」

そこに救世主が現れた。

「えっ、ルナちゃん先生?」

女子生徒達の中をかき分けて現れた同僚を見て、鮎川先生は目を丸めた。

クロノスだってそうだ。なぜイエローの副寮長がここに。女子たちもクロノスと同じ気持ちらしく不思議そうに彼女を見ている。

「ほらあーエミっち、どう？　すごい便利でしょこのコンボ。電撃鎖に人感センサー、トドメに捕縛用縄！　これならどんな不審者さんだっていちころなの♪」

「えっ……ああ！　さっき話していた防犯システムってこのこと？」

「そっ、あのハ——校長には去年からお願いしてたんだけど……やつと予算が下りたんだ♥」

今の会話からクロノスが理解できたのは二つ。元々ルナ・ベルケツトは鮎川先生とお話をしていたらしいとのこと。

そして自分はその防犯システムとやらにまんまと引つかかってしまったという事。

「せっかくだからみんなを安心させよう——ってことで、メデイっちに一芝居打ってもらったの♥　みんなもこれで安心だよねー」

ケラケラと笑いながらも絶賛捕縛中のクロノスに近づきそう語るルナ。しかしクロノスにとっては何が何やらである。

「えっ、そんなこと——」

「いいから黙ってなさいって」

思わず反論しかけたクロノスのわき腹にジャブが突き刺さる。対して威力はなかったが、言葉を詰まらせるのに十分であった。

周りはやや怪訝にクロノスを見ていたが……「ブルー寮の寮長がまさか覗きなんてしないだろう」という願望も相まってやがて警戒が解かれていく。

「そうだったの？　もう……びっくりしたわ。次からはちゃんと教えてちょうだい、ルナちゃん先生」

「オツケー♪　さてさてじゃあみんな解さーん、おやすみなさーい」
「……？」

鮎川が信じるという言葉にした事で女生徒たちもやがて興味を無くし、一人また一人と部屋へと戻っていった。

ただ一人、天上院明日香のみが少し粘ったが……勘のみで証拠もない。ならば気にしても仕方がないと彼女も寮へと戻っていく。

「ではクロノス先生、ルナちゃん先生。また明日」

「はーい♥ じゃねー!」

「……………た、助かったノーネ」

鮎川先生の後ろ姿に大きく手を振り、やがてその姿が見えなくなつて……ようやくクロノスは大きく安堵の息を吐いた。

その後ろから忍び寄る影が一つ。

「——ほんとですよクロノス教諭。お嬢様の機転が無ければ没落しておりましたよ?」

「シャトレーゼ!? あ、ああ……いたのですかM.S. セファイ」

メイドが鼻息鳴らし苦言を呈していた。位置関係からして……もしかして彼女が本来警報器を鳴らす役目だったのかもかもしれない。

つまりクロノスの犯行は最初からメイドに見られていたという訳だ。十代への恨み節だつて……。

安易に悪い事はするものではない、思わずクロノスはごちる。

「悪かったノーネ……もうこんなことしないから降ろして欲しいノーネ」

生きた心地がしなかった。

自分が嵌めようとした十代にこんな気分を味合わせようとしていたのかと知った彼は、心の底から態度を改めると誓った。

「え、いやそんなのどうでもいいんだけど」

「えっ」

知ったことかとルナは切り捨てた。足元に転がっていたニツパーで縄を切り、クロノスを地面に落とす。

尻もちをつき涙目になったクロノスを見下ろせば……その顔は断じて救世主などではない。悪魔そのものだ。

「メデイっちい〜これで、私に、この私に大きな力が出たよ♥」
地上にいるはずなのに、奈落の落とし穴に落とされた気分だった。

晩年、クロノスは知人にそう打ち明けたという。

「賭けをしよ♥ 私が勝つたらなんでも一つ言う事聞いて、負けたら

このことを水に流してあげる。メデイつちにはメリットしかないよ？

ま・さ・か、こんな美味しい勝負から逃げる、実技指導最高責任者さんなんてどこにもいないよね♥」

呆気にとられるクロノスに見えぬよう、サイドポーチからカードを抜き出しデッキに仕込む行為をして、微笑んだ。

SOLUTION 4 : 試験準備の解法

どんなことがあれど時は進む。

過負荷に耐えられず止まる歯車仕掛けの世界ではない。

学生たちの呻き声が響く島内。

後一週間もすれば、とデュエルアカデミアでは日夜学生たちが己の進退を願う研鑽に励んでいる。

目的は当然、学生にとつての苦しみ——試験だ。

……これはその中でもひとときわ励むものの一場面。

「フィールド魔法、疑似空間がフィールドから離れた場合。その前にコピーしていたカード名と効果は失うため破壊時や場から取り除かれた際の効果は発動できない、と……佐藤先生の出題するものは興味深いものが多い」

秋の夜長、ラーイエローが誇る秀才三沢大地は食堂で一人勉強を続けていた。

書きつられ続けるノートは積み重ねられ、『予習用1』『復習3』『応用1』『応用2』『応用3』と簡素に書かれたタイトル、おろされて真新しい筈の表紙。

その中にびっしりと書かれた文章と数式が彼の勉強量を物語っている。

「……でも、どうにも授業ではそこら辺を掘り下げてくれないんだよな」

授業で取り扱うものは褒めつつ、指導方針には思うところがある三沢。やや悩まし気にペンを手で遊ぶ。

当然、佐藤先生本人は真剣に授業をしているのだが……三沢が気になるものと、彼の担当する生徒の平均の低さ。これらの差が、優秀な三沢にとつては基礎も基礎の所のみで授業が終わるといふ問題を生み出しているらしい。

ただでさえ授業は三寮合同。知識の習得具合も違う者達を集めてうまくいくはずがないというのも原因か。

「しょうがない、気になる所は教科書と自分で進めるか……」

とうとうテスト範囲どころか教えられた箇所というタグ付けすら無視し始めて知識を集め始めた男。この行為が後に佐藤先生の心を苦しめることになるが……それはまた別のお話。

……そう、この男はテスト範囲など眼中にない。

テストには普段から勉強している所のどれかが出るだけなので、日ごろ完璧にしていれば態々そこだけを勉強し直す必要もない。

本心からそう考えているのだ。つまりこの勉強量すらも当たり前前のこと。

学生の本分は勉強だと言うが……あまりにそれは行き過ぎではないだろうか。学者にでもなるのか？ 彼の取り組みを見たイエローの生徒達はそう思ったらしい。

このままでは体を壊してしまうのではないか、危うさも見えた、が、

「……論理デュエル学はそれくらいにして、少しお休みになられませんか？ そろそろ食堂も立ち入り禁止の時間ですし」

「あつ、もうそんな時間か……ありがとうございますセフィさん」

ティーポットを片手にそれを制するものがいた。

子供にしか見えない副寮長に仕えるメイド、リゼ・セフィ。彼女の手元からは仄かに湯気が立ち上っていた。

「いえいえ。食堂の一部を使わせていただく代わりにありませんが、パトロールのような物を仰せつかっていますので」

時間すら忘れていた三沢に対しコーヒーを差し出して彼女はパタと片づけを始める。他の生徒が使っていた椅子をテーブルの上に置いたり、掲示物を貼りなおしたり。

三沢は特別な生まれではない故、メイドと言うものをまず見たことがない。しかしその仕事ぶりは素人目でも判断できる。

所作の一つ一つが完成しているとは言い難いが、一連の流れの手早さはまさに仕事にしている者の技である。

感心しつつ、三沢も邪魔にならないよう筆記用具を仕舞い始めた。

「……もう長いんですか？ メイドをされて」

さけれど、知識欲というのは唐突に湧いて出るものでもある。

うら若き、は言い過ぎだが未だ20代であろう彼女。その手際はどのように学んだのか。

不意に気になった彼は尋ねた。

するとメイドは何かを思ったのか、やや作業が遅くなりつつも背中越しに返す。

「――私が8歳の頃から今まで、ずっとお嬢様のお傍におりました」

「は、八歳……？」

十年、下手をすれば二十年近く。人生の大半を費やしてきたと語る彼女の後ろ姿に思わず三沢は息を飲む。

……あの、負けただけで試験中に泣きだしてしまうような主人に、という要素を付け足すと更に壮絶さが増した。

「……ふふつ、むしろ今の方が安心できますが？」

「えっあ、あの」

「メイドですから、人の顔は読めますよ」

いつのまにやら彼女は振り向き、三沢を見下ろしていた。細く切れ長な瞼から僅かに翡翠の瞳を覗かせ笑っている。

すぐく大人びている気がするのに、童心に帰っているようにも思える不思議な笑みだ。思わずドキリと三沢は強張る。

それすらもクスクスと笑うメイド。悪戯が成功した、そんな顔だった。

「昔のお嬢様は……勇ましくはありましたが、少し怖かったです」

そして語り零した内容に、やはり三沢の知識欲が触れる。

「……怖い？」

授業内容、持っているであろうレアカードの数々。

それらとは合わない程油断をする人だと思っていた。油断、侮りさえなければ確かに教師最強と名乗っても生徒から笑われない程度の実力はあると思っていた。試験前の事前調べで知った彼女の情報からもそう思っていた。

「……それは、アカデミアの教師になる際、生徒相手に50連勝した。その頃よりも前の話ですか？」

「おや知っておりましたか……その時も51戦目には手札事故を起こし何もできずに負けたので、そちらばかり有名になっていきますが」デュエルアカデミアの、しかも本校の教師になるためには厳しい試験を切り抜けるなければならない。

だが不思議なことに、一切の大会記録もない。学術、論文の一つもない彼女が鮫島校長の推薦により教育実習生になった。

当然、実力を疑われた彼女、示すためか来るもの拒まずで対戦を受け続け……51戦目で何もできず負けた。不名誉な話として語り継がれていたが、裏返せばそれだけ勝ちつづけたということ。

その後、教師として正式採用。今に至る。どれほどの豪胆さかと期待していた三沢は実技試験で驚いたに違いない。

「うーん……そうですね、ここの電気が落ちるまであと十数分あります」

時計を見てやや考えた後、彼女はキッチンから自分の分のマグカップを持ってきてポットから注ぐ。

先ほどよりか控えめに湯気が立っていた。

「折角ですし、私の暇つぶしとあなたの休憩代わりに……お嬢様の話でも聞いていきませんか？」

そう言って対面席に腰下ろす彼女を、三沢は何も言わずに受け入れた。

まだ夜は、終わらない。

「……あれ、お湯ですかそれ？」

「——ええ、最近のは粉を入れるだけで楽ですね」

そう言ってインスタントコーヒーを楽し気に作る彼女を、三沢は何も言わずに見逃した。

ここまでどうどうとインスタントを使うメイドというのも、初めて彼は見た。

「……あっちなみに私、紅茶を淹れること以外は他人に振舞ってはいけないとお嬢様から料理は禁じられているのです」

「そっそうなんですか？」

ここまで印象から三沢は考えた。

幼馴染に近いメイドの手料理を他人に食べさせたくないとか、それぐらいの可愛らしい独占欲の結果だろうか。

『その、リゼの料理は……うん。どんなものでも食べられるようにすることに關しては完璧ね!!』とお嬢様から太鼓判は得ておりますから、ご賞味いただけたいのは残念ではありませんが」

「ハハハ、マタノキカイニ」

どうしてか、謎の物体が乗った皿の前で震え目を逸らしているルナ先生が浮かんだ。あのなんでもストレートにぶちかます先生ですらお茶を濁すとはどんな事態だ。

突如脳内と連動し震えた体に、彼は粉が溶け切っていないココアを流し込んだ。



「だ〜か〜ら〜！　こんだけお願いしてるのに何で聞いてくれないのよお〜！」

あまりに卑劣な戦いの決着がついて早一日。

またしても校長室にて、一人の女兒が校長へと食い下がっていた。

抱えた書類を机に叩きつけ、ピョンピョンと跳ねる様はウサギのようだ。校長は可愛らしく表現した。

「もう一回言うわよ……今度の入れ替え試験の方式を変えてほしいなあって♥」

更に可愛く仕上げるため一度息を整え、両手で頬杖を作り首を傾けた。

これぞ世の男たちをぶりっ子してるなあーと言わせながら警戒を緩くし、女子からは嫌われる奥義の一つである。

使われて困らなかつた男たちはいない。

「――駄目です」

だが無駄……ッ！　すでに何度もその奥義を使われてきた校長に
対し、もはや無意味……っ！

無慈悲にも書類はつき返される。

「なんでえ!?　イエローの副寮長、オベリスクブルーの男女両方の寮
長の意見書なんてかなり効力あるでしょう?!」

「いえ、そもそも試験の一週間前にいきなり試験方式を変えるわけに
は……」

これは正当な回答である。繰り返す校長に対して一教員であるル
ナ・ベルケツトにはどうすることもできない。

寄付金戦法も使えなくなつた今、きちんと「教員としてこんな意見
が出ています」と書類を集めた彼女の成長を褒めるべきではあるのだ
が……。

「大体筆記はともかくとして実技を評価する今のやり方。同じ寮の、
実力が近そうな一人としかデュエルしない。しかもそれを眺めてな
んて参考にならなすぎるのよ！　それを見て『昇格に相応しいか』な
んて判断つかないわよ！

だからこうして『5人グループで総当たり戦』優良な成績をとつた
者は上位の寮のデュエルして勝つたら昇格！　つてシステムチツク
にした方がいいって提案してるんじゃない！」

その他、「レッドの寮は実技のみ優良でも上位昇格デュエルを受け
る権利」「ブルーは下位の者の昇格デュエルで負けたら即降格」など、
明らかにイエロー寮に人を集める気満々の改革案。

それにしても一応形としてはより実力を測りやすい、寮間の流動を
活発化させる狙いが分かる改革案。急過ぎるためか校長へのウケは
とても悪い。

「いや、それは分かりますがやはり生徒達は色々準備してきているわ
けで……複数人とのデュエルではデッキの構築も変えなくては」

事実、対策を練られやすい戦略を使うデッキとしては致命傷になり
得る変更だ。初見殺しが悪いという訳ではないしやはりいきなりは
……。

「一人にだけ勝てばいいなんてデツキ構築してる奴は落とせばいいのよんなもん!!」

それを知ったことかと切り捨てる教師のクズ。

彼女のサイドポーチには対機械族、対コントロール、対パーミツションと言った厄介なデツキに対してのメタカードが複数隠されており、いざとなったらすぐにデツキのカスタマイズが出来る様にされているのは秘密だ。

「ワタクシ相手にメタカードバリバリ入れてたオコサマが何か言っているノー……ネツエエ!」

「えー♥? メタに対してのメタも考えてないデツキを使う実技指導最高責任者が何か言っているけどルナってば子供だから分かんない♪」

意見書を書かされたクロノスはやや不満げにルナの隣に立っていた。が、愚痴を一切聞き洩らさない地獄耳少女につま先を踏まれ言葉にならぬ痛みを叫んだ。

そのやり取りを見て何かあつたと校長は悟っているが、少女に付け込まれたのが悪いと見て見ぬふりをする。

システム・ダウン、酸性雨、或いは古代の機械が多く持つ共通効果「このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罫カードを発動できない」に対し攻撃宣言時などに発動するカードをフリーチェーン——発動タイミングを状況に左右されないものたち——に入れ替える悪行をさらりとやってのけた少女にクロノスが勝てる道理はなかった。

「(くう……このオコサマ教師めえ、後で覚えているがいいノーネ!)」
企みが危うく明るみに出そうだった彼も懲りていない。しばらくすればまた何かひと悶着が起きるに違いない。

「オホン、この改革案は非常に面白いので。次回から少しずつ導入……という形なら考えられますが」

「えー……そんなゆっくりの改革なんて生ぬるすぎい」

急進派である彼女には思い立ったらすぐ実行しなくては気が済まないタチだ。この校長からの譲歩にも不満げにしていたが……、

「……！　じゃ、じゃあもう一個の方は認めてもいいって事よね！？」
こっちは生徒の準備とか関係ないし！」

「……断る理由もありませんし、一度見てもらった方が早いと思いませんからな」

意見書に書かれていた「試験方式への疑念」とは別の嘆願。こちらは別に否定もされていないと気が付いた彼女は上機嫌になった。

生徒の為だとか何とか言っていたが、やはり現金な女である。

一方そちらも書かされたクロノスはやや面倒そうに肩を落とす。

「かつて特進クラスの生徒の為に作られました。が今や廃寮。立ち入り禁止となっていました……マスターブラック寮の改築案。とはいえ、学園から予算は出せませんよホントに？」

「いーのいーの、こっちは私財で進めるし……まだ建つてそこまで経ってないから痛んでる箇所だって少ない筈……！」

森の中に存在する廃寮。勝手に掃除なりなんなりをしてくれるなら学園としてもお願いしない理由がない。どうせ使えなくてもメンテは必要なのだ。

あんなものをどうするのかと校長は不思議がっていたが……ルナには一つ夢がある。

「ラーゴールド寮の為の場所が欲しいのよ！」

「……そのラーゴールド、とかいうものの許可は出していませんよ。」

「グフフ……森の中の洋館とかお洒落でいいわよね。なんか幽霊が出るとか噂もあるけど、そんなの気にしないし見つけたら従わせて……」

ゴールドへの道はまだまだ道は遠い。

それでも確かな一歩を踏みしめた、進んだと思ったルナは校長の苦言は聞き流し両手を上げて喜んだ。

「……洋館のゴーストお？　ふうむ……なるほどなノーネ。ぐふふふのふー……」

その様子を横目に、痛い目を見たばかりの彼もまたいい企みを思いついたらと喜ぶ。

二人が怪しげに笑っているので思わず校長は「意外と相性は良さそうですな」と他人事のように呟いた。

「はくあつ、いくらなんでも論述が雑過ぎる遊城お兄ちゃんにこの問題が解けるわけないじゃ〜ん♥ 大人しく次の人に手番を渡したら？」

「今ならその心意気だけは買ってあげるよ?」

どんな時でもめげない、諦めないそんな気持ちこそが勝利を手繰り寄せる。デッキが尽きぬ限り、カードを信じていれば応えてくれる。精神論者がよく語る言葉だ。ルナはそういつた幻想が大嫌いの方がない。

めげないからどうした、諦めないからどうした。そんなものは当たり前の話。カードが応えるのではない、そのデッキをくみ上げた過去の自分が応えるのだ。

「いいや? それと実技は別モンだろベルちゃん先生」

「人を舐めてるのかよく分かんない愛称はやめなさい……せめてルナちゃん先生!」

勝者とは勝負を始めるまで最も努力をし、勝てる算段を最低でも一つ見つけた者のことである。彼女は常々そう語る。

故に彼女が勝負前に敵を侮ることは……勝つ努力を終え、算段を多く見つけたことの裏返し。もしくは相手が努力を怠っていた場合。

「今回はノーマルカードだけどそれなりに希少なフィールド魔法、ハーピイの狩場。そして最近出てコレクター人気も高い、一枚当たり云万円の価値があるハーピイの羽根吹雪。」

更にはパラレル以上なら二桁万円で取引されることもある……いや今回はスーパリアカードだけど、超レアカードの波紋のバリアーウェーブ・フォースー!

オシリスレッド、しかも勉強もおおざなりになっているアンタじゃ解法にたどり着けないでしょう!? ……今更だけど勿体なくなってきたわね。さつさと不正解にならないかしら!」

それと彼女自身が持つ、自分は出来る、成し遂げるといふ溢れる自信。子供じみた全能感。なにがあらうと自分さえ動けばなんとか

なる。何故なら私は素晴らしいから。

原動力であり、行動指針。折れぬ限り彼女は目的に向けて走り続ける。

それはさておき、わがままな側面も強いルナ。

スーパードレリアで部屋に帰れば腐る程あるカードでさえ渡すのが嫌になってきたらしい。目の前のオシリスレッド、筆記実技共にレッドゾーンと評価された制服を通す子供の前で、早くアウトな選択肢を取らないかじれたいなどパーカーの袖を回す。

「（蘇生対象、召喚モンスター或いは攻撃順番。今回は迂闊に進むと間違えるものばかりよ、ふふふ♪）」

だがしかし、目の前の男はそんな見え見えのものなど取らない取るわけがない。

何故ならこの男、オベリスクブルーの寮長を実技試験で打ち倒し教師の私怨でレッドに落とされた人間だから。

「俺はフィールド魔法、アンデットワールドを発動！」

遊城十代、一年生たちの中ではトップクラスの实力者。

ヒーローにはヒーローの戦う舞台があると実技試験で摩天楼を観衆の前で披露した男が今度はアンデット達の世界を展開する。

草木は枯れ果て瘴気が蔓延する死に尽きた領域こそ、空に飛ぶハーピーたちを落とす兵器であり死者たちが蔓延る場所。

それを前に、ルナの羽根吹雪は動きを止めようとしている。

「ふうん、じゃあルナちゃんはくチェーンしてトラップ、ハーピーの羽根吹雪を発動！ チェーンされたカードは逆順処理♥」

アンデットワールドの墓地フィールドのモンスターをアンデット族扱いにする前に羽根吹雪が適用！ これでこのターン、アンタの発動したモンスター効果はすべて無効よ！」

「ならこれだ、手札からマジックカード死者蘇生を発動！ 先生の墓地のハーピー・レディを俺のフィールドに復活！ 更に通常モンスターのハーピー・レディを生贄に装備魔法、戦線復活の代償！ これで先生の墓地からもう一体ハーピー・レディを復活！」

「げっ」

思わず可愛くない声を出したルナ。それを見ていた生徒達は首をかしげる。

わざわざ相手の墓地から復活させるのは攻撃力1300で効果もないモンスター。しかもそれを生贄してまで呼び出すモンスターも同じ。

なにがしたい？ その疑問はアンデットの世界でも渦巻く竜巻が答える。

「……ハーピィ・レディが特殊召喚された場合、ベルちゃん先生のフィールド魔法ハーピィの狩場の効果が発動。伏せカードが破壊される……だろ？」

「ぎゃあっー」

その言葉を是と示す風のうねりがルナを襲う。

この試験の解法、それは敵のフィールド魔法を駆使しハーピィをルナの墓地から特殊召喚。効果で厄介な伏せを破壊すること。それさえ気が付けば容易ではある。

だが意外、ヒーローカード馬鹿だと思い込んでいた相手が使えもしないハーピィテーマのカードを知っているはずがないのに。

観客と化している生徒達ですら知っていたのはごく一部のザマなのに。

「嘘?! なんて狩場の効果を知ってるのよアンタ!」

「へへっ、偶々この間買ったパックに入ってたな。それじゃあ……二枚目の戦線復活の代償、ハーピィ・レディを生贄に、幻のグリフォンを復活! 手札からゾンビーノを召喚!」

「(くそっこいつどんな引き連だこんにやろー!!) え、ちよつちよつと待っ——」

「ゾンビ・マスターでハーピィ・レディーを撃破! グリフォンで三姉妹、ゾンビーノでダイレクトアタック!!」

「ぎゃああああ!!」 LP : 1850 ↓ 1650 ↓ 1600 ↓ 400



「……ええー」

流石に泣きわめきはしなかった。むしろシヨックの方が大きすぎて呆然としているルナ。ざわつく教室内で十代が喜び、彼の友人である丸藤翔も興奮している。カード効果が分からない生徒が多くおり、彼の前に既にブルーの生徒が挑戦し間違えていたから。

……その生徒はそもそも手渡されたカード効果すらよく読まずに散ったから論外だったが。

「……仕方ないわね、ほらさっさともってきなさい。ウエーブ——」

「じゃあ俺は……戦線復活の代償を貰うぜベルちゃん先生！」

どうせウエーブ・フォースだろう。アテを付けて手に握っていた彼女の意表を突いた発言がまた呆然とさせる。

「えっ……ああうん？」

思わず止まり、自分が何と言われたかを振り返り要求されたカードの名前を思い出す。戦線復活の代償、ノーマルカードでありながら利便性の高い装備魔法の一つ。

売れば一日の食費にはなるといったところだろうか。狩場などと比べるとまだ数は多いがこれだってそれなりに珍しいカードだ。

……だが、明らかなレアカードより優先するものではない。

「い、いいの？ これも確かにまだ数は多くないけど……ハーピー系のカードはともかくウエーブ・フォースとか」

「いやその辺よくわかんないし、俺のデッキにはこの装備魔法が合うなって思うんだ！」

少し頭を搔いた後、自分のデッキが入ったケースを自慢げに見せびらかす十代。

彼のデッキは一言で表せば……融合HERO。

貧弱な通常ヒーローだったりの力を合わせ強力な融合モンスターで決めにかかる。確かに通常モンスターをコストにするカードは相性がいい。相手の墓地を活用できるようになれば自分のデッキでは

不可能な布陣を突破することも出来るようになるかもしれない。

しかしやはり、防御用として非常に優秀な波紋のバリアの方がいいんじゃないか。教えるべきか？

いやしかしここで渡さずに売れば少しは資金にもなる。頭の中で金勘定が始まる。

「……うん。なら、特別に二枚あげるわよ？ ええ、うん」

「おおっ、いいんですか!? サンキュールちゃん先生!」

考えを巡らせた後、女兒は金を選んだ。それを知らずに喜ぶ十代。価値を知っているらしい一部の生徒はやや馬鹿にするように笑っている。それを見てルナは「そもそもお前らは狩場の方に気が付かなかったろうが」と煽りたくなる気持ちが湧いた。

十代の純粋な気持ちを利用して？

本人がいいって言うてるんだからいいわよね! ルナは罪悪感を切り捨てた。

……あとで赤点でも取りそうだったら一問ぐらいは論述を甘く見てやろう。そうも思った。

数日後の筆記試験にて、早速彼がその猶予を使う事になるとは思ってもしていない先生である。

「……さて、じゃあ授業に入るわ! 今回は相手の墓地の利用。つまり相手が墓地に送ったカードへの注意を取り扱う訳なんだけど……」
これ以上その話題が続くの不味い、強引に実技タイムは終わりだと告げ本題に入った。

これからは液晶にカードを映し出し、それに関しての所感を述べたりするコーナーだ。

佐藤先生の授業に比べれば理論だてられ教科書になっているわけでもない。更に彼女は今年から授業を受け持ったため過去問もない。

先生の話を聞かなければ試験の成績が酷い事になる可能性が高い授業だ。生徒達は嫌が応でもノートに彼女の言葉を書くしかない。

「よしよし皆慌ててノートを出して……流石、三沢はとづくにノートに書いているわ。……なんか三沢の目線がやや変な気がするわね?」

資料を出すふりをして生徒達をチラリと見やるルナ。約一名、とあるメイドのイタズラにより彼女を見る目が変わっている者がいる。

……とりあえずマジに授業は受けているので彼女は無視した。

「(あ、あれでしょ。どうせ失礼なことしか考えてないわきつと。それ・よ・りい〜?)」

それよりも、この状況でも鼻高くおとまろうとしていた奴に目をつける。

「はいいきなり問題♪！ おろかな埋葬、深海のアーチザン、カードブロッカー。これら三枚に共通する効果はなんでしょう♥ じゃあ〜

——さつきからニヤニヤしてる万丈目改めメジヨっち!」

「メジヨっち!? なんだその呼び方はふざけ——い、いやそもそも俺はニヤニヤなどしておりませんベルケッツ先生!」

オベリスクブルー一年のエース。万丈目グループの三男であり取り巻きが何も言わずに彼の分のノートすらとる。そんな状態で十代の物知らずさを笑っていた男——メジヨっちが指さされる。

思わず椅子から滑り落ちそうになった彼は抗議の意を含めて立ち上がった。憤りは拳に宿り、机をたたいて教室に音を響かせてしまふ。

「やあんこわーい♥ 私はただ指名しただけなのに!」

ルナは想像通りの反応を示してくれた彼に気を良くしつつ、猫耳フードを被り僅かにかがんで防御姿勢を取る。

そうすればネクタイも見えなくなり本当に子どもをイジメている絵面にしかならないという狙いを込めて。

「ぐっ……い わかりましたよ、答えればいいんでしょう!? デツキから好きなモンスターを一枚墓地に送る、蘇生能力のコストとしてデツキの一番上を墓地に送る、攻撃対象になった時デツキの上から三枚まで墓地へ……いわば墓地増強です!」

「あつ正解♪ 深海のアーチザンなんて出たばかりのカードをよく覚えてたね。えらいえらい♥」

これに関しては素でルナは褒めた。自分でさえも最後のお小遣い月に手に入れたばかりのカードだ。ただのレアカードとはいえない

ばかり、世界に枚数がなければ高値がつく。

先ほど十代に渡した戦線復活の代償よりかははるかに高い値打ちが付くカードだ。

「じゃあメジヨっちは座っていいーよ〜」

「…………ふんっ」

苦戦することなく正解したことによる周りの羨望の目、教師の乱雑な扱い。色々と含みを込めたため息について万城目は席についた。

更に気を良くした彼女は、授業の資料として持ってきたカードたちを手元のカメラで撮り液晶に映す。

希少なカードの登場に思わずおおっという声が漏れる。優越感を女兒が感じる瞬間。ろくでもない趣味だ。

「さてそれらがこのカードたちな訳なんだけど、墓地を活用するデッキにはこういった墓地肥やし加速のためのカードが必要不可欠なの」
墓地活用、その言葉を聞いて何人かが眉を顰めるが教師は気にせず続ける。

「墓地から手札に戻したり蘇生したりするカードは多いけど結局カードが墓地になきや意味がない。デッキからカードを墓地に送るカードの中には魔法トラップを手札に加えたり、攻撃力をアップさせたり、或いは墓地に送ったカードが効果を発動したり。

とにかく便利なカードが多い印象ね」

墓地は第二の手札とはよく言ったもので、墓地に落ちたカードを活用するカードはたくさんある。蘇生系カードや、墓地のカードを使って融合。

或いは墓地のカードの数や種類を参照しその多さで効果を発動。ルナの第一のデッキはその辺りはあまり取り入れていないがその有用性は強く理解している。

「今じゃ大人しくなったカードだけど昔は自分の墓地枚数だけを参照した現世と冥界の逆転。これを使ったワンターンキルが流行ったのなんて記憶に新しいんじゃない?」

現世と冥界の逆転 通常罫

デュエル中に一枚しか発動できない。

一・お互いの墓地が15枚以上ある場合にライフを1000払い発動できる。

お互いにデッキと墓地を入れ替え、その後デッキをシャッフルするかつては自分の墓地しか参照しなかったクソカードよ！相手の墓地が0枚でも入れ替えてデッキ切れで敗北させる戦法に使えたわ！

書き換えられたカードを提示しながら、いかに墓地増強が恐ろしいかを説く。

今回使わせてみせたアンデットカードなど墓地に送られてからが本番なところすらあるのだと熱弁するのはなかなか。恐らくは目の前の教師の経験から来るものなのだろう。そう生徒に思わせるだけの圧があった。

しかし、

「……」

反応がやはり良くない生徒がどうしてかいる。万丈目や天上院、十代や三沢という上位勢は頷いているものの、墓地に一度落としたカードなど使いたくないというのか。はたまた自分が好きでくみ上げたカードを積極的に墓地に送りたくないのか。

この辺りは今の今までデュエルをただ遊びとしてしか捉えてこなかった者との意識的な差がある。そう彼女は考えていた。

「まあ私だって、子供の頃にピケルたちを墓地にガンガン送る様なデッキは組まなかったでしょうね……いやあの子たちは墓地送ってもそこまで意味ないけど」

前者はぶちのめすが、後者の気持ちは分からないでもない。多量にカードを持ちお気に入り以外は金庫にしまつて愛でる様な彼女でもそう思う。

少ないお小遣いをためてカードをかき集め、この学園までやって来たような人間。或いは子供の頃に出会ったカードを大切にデッキを組んでいる者。

もの。

「(……こいつら強くなる気あんのかしら)」

魔法や罫はともかく、リアルなソリッドビジョンを前に彼らを墓地に送るのが気に咎める者。多々いるだろう。

「(そんなにモンスターを墓地に送りたくなきや魔法一色か罫一色でも作ってなさいよ。又は除外デツキ)」

だが、だがしかしそんな甘い事を言っているようではいつまでたっても強くなれない。

プロになるためには、ラーゴールドを作り上げるためには意識改革が必要だ。ルナは感じた。

だからこそ、やや自分の中に納得できない部分があったが、「はあ……なら少し、わからせてあげる」

溜息一つ吐き、彼女の頭は詰めデュエルの構築へと向かう。

寮の入れ替え試験まで、あと四日。

「——と、言う訳でここまで「墓地に送ったモンスターカードの攻撃力」と「リリースしたモンスターの攻撃力」、「除外したモンスターの攻撃力」における参照する攻撃力はいつの時点のものか、例を見てきました。

ではここで……三沢君、振り返りになりますが「墓地に送ったモンスターカード」の攻撃力を参照する効果はいつの時点のものか、回答をお願いします」

「はい、それは墓地に送られたあと、つまりはフィールドでの変化が消えた後の数値が参照されるものと思われれます」

「ええ、その通り」

佐藤先生の抑揚のない授業が続く。内容は興味深いものを取り扱いつつもあまり工夫のない。彼が用意した、ルート通りの講義はあまりに平坦で驚きも薄い。

生徒の中には首をコクリコクリと揺らし眠気にあらがうものさえいる始末だ。

「……イエローの生徒は後で叱っておくとして——それにしても相変わらず眠いわねこれ。せめてリリースしたモンスターの攻守参照効果はどうなるのかとか、墓地にカードを送れない状態ではどうなるのかとか解説しなさいよ……」

そんな中、頬を噛む姿を吠え杖をつくことで隠す狡い者が一人。ルナ・ベルケットである。

自分が受け持たない授業に混ざっているのはとある事情の為だが、先輩先生に対してこの態度はいかなものだろうか。

咎めようとする度胸のある者はいない。

「……しかし、問題を作ったら凡ミスをしたお嬢様にとっては基礎を学び直すのは重要では？」

「……うっせー」

一人いた。書き取りをしているお嬢様の横でなぜか懐中時計を磨いているメイド。セフィが磨けば磨くたびに金の懐中時計は輝きを

増していく。

その光が強くなるたびに強く思い出していく、三日前の醜態。ヒソ
ヒソ声で掘り返されていく。

受け継がれる力 通常魔法

自分フィールド上のモンスター1体を墓地に送る。そして自分
フィールド上のモンスター1体を選択。

選択したモンスターの攻撃力は、発動ターンのエンドフェイズまで
墓地に送ったモンスターカードの攻撃力分アップする。

フィールド上での数値は参考にしない。つまり妥協召喚で攻撃力
が変化しているモンスターを送ったとしても変化する前。元々の攻
撃力が参照されるわね。

……うん。

「危うかったですね、自信満々に生徒達に見せる前に気が付けて本当
に良かった」

「……受け継がれる力のテキストを忘れてたのよ、うろ覚えのカード
は二度と使わないわ」

墓地に送ったモンスターカードの攻撃力分参照効果を忘れていた
お嬢様。おかげで修正前はどう足掻いても詰めない問題になっ
た。

問題をホワイトボードに書き、生徒に出題しようとしたその一瞬で
気が付き、慌てて「ち、ちちちちちよつと脱字があったわ！ このカー
ドを追加しなさい！」と攻撃力2500のエレキテルドラゴンを追加
するハメとなったのだ。

なお、修正前では、自身の効果で攻撃力を2500に上昇させた神
竜エクセリオンを解法に使用するものであったが先ほど語った勘違
いにより、これを受け継がれる力で使用すると元々の攻撃力である1
500しか上昇しないという結果に終わる。

「しかし、エレキテルドラゴンを生贄召喚し受け継がれる力で使えば
いい。他のカードはスピリット・ドラゴンの攻撃力上昇に使えばい
い。酷く簡単な問題になりましたね」

「……スピリット・ドラゴンの効果が複数回使えるなんてあまり知られてない効果だし。い、一応みんな苦戦したでしょ？」
「貴重な究極竜騎士が景品になっているにしては随分と簡単な問題でしたが？」

少しデュエルの勘があれば正解できるヌルゲー。それに十数万はくだらないカードを使うなんてとメイドはやや怒り気味だ。元々使わないカードの一部は処分してほしいと考えていた彼女だが……言外に、売ればよかったのにと伝えている。ルナでさえもそれはひしひしと思っている。テンションに任せてやりすぎた。

この授業の後に校長からあまりに貴重なカードをプレゼントしたことで怒られる予定なのだ。

せめて十代の様な自分が使わないカードしか狙わない人間が回答してくれたらよかったのだが。

「……ま、まあちゃんと優秀な子が勝ち取ったんだからよしとするわ」
誰か解くものはと尋ねた際に鬼気迫る勢いであげられた挙手の数と言ったら。考えに考えたルナは……「仮に究極竜騎士をゲットしてもまあ納得できる」人間を指した。この時に三沢が手を上げてさえいれば彼にしていたというのに。何故かこの時は参加せず授業の行く末をじつと見つめていたのだから腹の立つ瞬間だったと彼女は思っている。

そんな苛立ちを三沢にやりつつも、ルナはふと視線を後ろにやった。

「……」

青い制服がどこか誇らしそうに輝く。

退屈な授業、理解していると云わんばかりに腕を組み机をじつと彼は見ていた。

その先にはテキストではなく、一枚のカードが置かれていることだろうことをルナは知っている。

「メジヨっち、すっかりあのカードに魅入られちゃったみたいね。まあホログラ仕様の究極竜騎士なんて綺麗だし」

「彼が使用するカードは地獄、ヘルと付くものが多いですがひねくれ

た格好良さ好きというわけではないようですね」

カードは彼に渡された。万丈目グループならば資産を使い手に入れることも可能かもしれないが、それでも貴重なカードだ。

究極竜騎士にカード効果耐性はない。デビル・フランケンといったコストを支払いエクストラデッキから特殊召喚……することも、究極竜騎士の「このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない」という制約によって不可。

更にはよりにもよって、融合素材に青眼の究極竜（世界に現在三枚しかない青眼の白龍を三体が融合素材）を指定しているせいで融合召喚だってしづらい。

「せめて、せめてもうちょつと出しやすかったら使いやすかったんだけど」

はつきりいってルナにとつては完全に観賞用カードだ。それでも、時として圧倒的なステータスとイラストは浪漫として人を魅了することがある。

電流が走る、という奴だ。ルナにとつても何枚かあるが、このカードでデッキを作ろうと思いつ。多少使いづらさはあるがこれを使いたい。デュエリストとしてはよくあることだ。

だからこそ、だからこそルナは少し不安に思っていることがある。

「まさか……今度の試験で使う気じゃないわよねメジョっち？」

あの目は明らかに、どう使うかを考えている目だ。彼の頭の中は授業ではなく、デッキレシピで埋め尽くされているに違いない。

しかし、あまりにもそれは無謀だ。ルナは考える。

「（まだ明かされてはないけど……アンタの相手は、遊城ちゃんよ？）」
ブルーの生徒でトップ、そんな彼は……とある教師の思惑により彼に見合った強さである……オシリスレッドの十代が当日の試験相手となつている。

それだというのに使いづらいエースを仕立てたデッキにいきなり変更しようものなら、扱いきれず惨敗する恐れすらある。

「（E・HEROデッキの強みは応用性。綿密な戦術を企てないと翻弄されるわ。そしたら……）」

そうならば色々和不味い事になる。きっとルナはそれを心配しているのだ。

まず万丈目はいくら強者とは言えオシリスレッド相手に惨敗。周りからの評価低下は激しいものとなるだろう。特にブルーの、ひいては寮の、この学園に根強くある階級意識に傷をつけたとして、今まで彼を煽てはやしていた者達は彼を責めるに違いない。

プライドが高い、大手グループの三男という恵まれた地位で育ってきた万丈目にそれが耐えられるのか、先生としてしんば——。

「(そしたらつ、ルナ先生のカードを手に入れても強くないとか思われかねないじゃない!!?)

絶対それだけは嫌！　せめて使うにしてもちゃんと使いこなしてもらわないと！　元は私のカードだから！」

全然違った。相も変わらず最低であるこの先生。少しぐらいは生徒に対する気配りというものをしてほしいものだ。

「セファイ、メジヨつちがちゃんとしたデッキを。それに向けたカードを今所持していると思う？」

「む……それは難しいでしょう。プライドを捨て彼の舎弟たちから集めたとしても厳しいです」

この学園で暮らす、ブルーの生徒ならばそれなりのカードを。万丈目ならばより強いカードを持っているかもしれないが……究極竜騎士などというカードに似合うものを持っているとは考えづらい。

「……普通に考えれば、明日の試験に間に合うはずもない。か」

——考え方を変えればそれはとてもいいことだ。万丈目とてデュエリスト。まともなデッキも組めなければ流石に使うことはしない。一番に面倒なのは中途半端に組めてしまった時だから。このままいけば万丈目は元々のデッキを使う事だろう。

……しかし、ここに一つの問題がある。

実はあるのだ。生徒である彼が……カードを大量に入手する手段が。

明日に控える昇格試験……実技試験に不安を覚える生徒達の為に用意された救済が。この学園にしては珍しく存在してしまっている。

「…… I 2 社からの行為によって実現した——超・超・超

レアカード封入率上昇、買えば必ず当たると言われている……ドリームパック!! 更には普段ならあり得ない、公式から提供されたレアカードを単品買いできるチャンス……!」

デュエルモンスターズの生みの親であるペガサス・J・クロフォード。彼をトップとするアミューズメント企業。そこでの協力により成しえたデュエリストならば手をだす他ない爆アドバンテージイベント。ルナはこの行事をそう評している。わなわなと震える指からも、そのイベントに参加したいという欲望がありありとみて取れた。

……昨年、生徒を押しつけ購入しようとして校長に叱られていたのも今となっては懐かしい出来事だ。メイドは遠い目をした。

「……去年までと何一つ変わってなければ、整列もくそもない。最初にレジにたどり着いた人間から。購入数制限もなし、財布が許す限りの争奪戦」

「万丈目さんの財力、取り巻きによる数。買い占めて渡せば……当日入荷されるカードにも寄りますが、中途半端でも完成してしまうかもしれないですね」

当事者だからこそわかる。恥じて欲しいが。

あの競争は一見弱者の救済に見せかけていて本質は強者が総取りするもの。万丈目が参加すれば結果は火を見るより明らか。

ルナには明日の今頃、万丈目の前には大量のレアカードが集められているのが目に浮かんだ。彼はそれらと究極竜騎士を合わせて作ったデッキを実技試験に持ち込むことだろう。

……自分の相手がオシリスレッドとも知らずに。

「——冗談じゃないわよ、中途半端なんて許さない」

授業の終わりを鐘が告げる。佐藤先生が次回迄の予習を生徒に求めているが、ルナを含めて多くの者が聞いていない。

ペンが今にも折れそうなほど握りしめ、指針を決めた。

全ては自分の為、ラーゴールド計画の一環である「ルナ・ベルケツトについて行けば強くなれる」という風評の為。

彼女は考える。もはや来ないお小遣い。手持ちのコレクション。

どうすれば彼のデツキを作れなくするか、それが完璧なものにするか。

「セフィ、知恵を練るわよ」

昼だ昼だと購買や食堂にかけて行く生徒達を後目に、ルナは宣言する。

セフィもまた、少し小さく息を吐いて。

「かしこまりました、お嬢様」

わがままなお嬢様を支えると言っただけだ。

決闘者に大事なものは何だろうか。

知識、技術、経験。そして時の運。それら全てを兼ね備えていたとしても……心が弱ければ意味がない。

決闘者とは時に非常な選択を迫られるものである。

切る手札が勝敗を左右以上、感情に縛られていては最強にたどり着くことなどできはしない。

だからこの男、三沢も手を下す必要があった。

「俺はー。魔王ディアボロスをリリースし、闇のデッキ破壊ウィルスを発動！ 先生のフィールド・手札の魔法カードを破壊します！」

「はあ!? ちよっ……なーんてね♪ 魔術師の左手の効果を忘れてない? 罨カードの発動した効果を無効にして破壊しちゃうの♥」

闇の支配者であるドラゴンが息絶えたかと思えばその亡骸からあふれ出す細菌。しかし、それらはルナが指を鳴らすだけで消え失せた。媒体となったディアボロスごと花火となって散る。

会場に「ああつ」と残念がる声が木霊する。それが酷くルナには気持ちが悪かった。

「ざんねーん！ 魔王ちゃんの犠牲も意味なし……無駄死に? 優秀な三沢っちならこの結果が分かってない訳ないのにひどいんだ〜」

三沢のプレイングを責めるように言葉を並べる教師。その言い分には一理ある、しかし現在何しても無駄に近い状況にしたのは彼女自身である。

「ひ、ひでえよルナ先生……あれじゃ三沢も何もできねえ」

「だいたい何で生徒の実技試験に教師が出て来てるんだよ」

観客席で結末を見守る生徒たちが口々に漏らす不満。あまり男らしいとは言えないが……生徒の一進一退がかかる試験に大人げない盤面を揃えたのだ。必要経費である。

魔法使い族がいる限り魔法が封じられるフィールド魔法、魔法族の

里。

ルナの闇属性モンスターを除外し、三沢の闇属性モンスターの攻撃宣言を封じる壁となった永続罨、エレメンタル・アブソーバー。

そして……魔法使い族がいる限り、罨カードが発動した効果を1ターンにつき1度無効にし破壊する魔術師の左手。

完全なる封殺だと生徒達には思えない。いくらライイエロー一年主席という立場の男でも無理だ。

「さ・ら・に……ルナはね？ たった今、ピケルたちのチカラでライフが4800！ 対する三沢つちはあく1100！ そして……三沢お兄ちゃんもディアボロス君の効果で確認したと思うけど、攻撃力2800のブリザード・プリンセスが手札にあるの。」

アドバンス召喚してエンドを宣言するだけでエクトプラズムってしゅうりよう！?」

そういつて手札をチラつかせ挑発する教師。わざわざ三沢のカード効果でとどめを刺そうとしているのは彼女の煽り気質に由来している。

——違う。彼女はそう言っ三沢の顔から視線を少しもずらすことがない。いつもならヤジを飛ばす生徒たちに嫌味の一つでも飛ばすところだというのに。

「そうならないと、気が付いているのですね？」

「……そりゃ、諦めた子とそうでないの見分けがつかないほど節穴じゃないしい？」

花火が終わり煙が晴れようとしている。

三沢が襟もとをただし、ルナが構えた。何かをしでかす。確信の元の確認だった。

無効化されるのが分かっいてエースを生贄にするバカではないと理解している。

「……では、見てください。これが俺の狙いです！」

そのある種の警戒、期待に込めるべく三沢が腕を振るった。煙が晴れる。

晴れたかと思えば雲る、先ほどのウイルスよりも深く毒々しい瘴気

がフィールドに現れる。

辺りを支配せんと低く揺れる咆哮が響き渡る。

牙が爪が、その姿を現した。

「——っ、その姿……闇黒の魔王ディアボロスですって!？」

ディアボロスの亡骸が弾けた中より、更に純度の高く深い深い闇の王が生まれた。

新たな王の姿を祝福するように三沢のモンスターたちが胎動し鳴動する。

・闇黒の魔王あんこくディアボロス 効果モンスター／レベル8／ドラゴン族
／攻・守 3000・2000

このカード名の1・3の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

一・このカードが手札・墓地に存在していて、自分フィールドの闇属性モンスターがリリースされた場合に発動できる。

このカードを特殊召喚する。

二・このモンスターがモンスターゾーンに存在している限り、相手はこのカードをリリースできず、効果の対象にもできない。

三・自分フィールドの闇属性モンスター1体をリリースして発動できる。

相手は手札を1枚選んでデッキの一番上または一番下に戻す。

魔王ディアボロスが進化した姿。攻撃力は3000! 手札をデッキに戻しちゃう効果も超強力。魔法使い族だったら使ってたかもしれないわね。

闇のデッキ破壊ウイルスの効果は囷か。その狙いは真のエースを引きずり出すためだったのか。

そう観客たちがざわつく。だが、だが対峙している教師はそれを真意だと信じるわけにはいかない。

「なっ、なんでそんなカードをここに……!?!」

「これは、先生が不要カードボックスに——」

「違うわよ、入手経路じゃない！　なんで今のタイミングなのかっそう聞いているの!!」

自分が複数持っているからと出したカードだ。持っていて不思議ではないのは理解している。

だからこそ、だからこそ今の今まで出てこなかったから油断していた。あるならもつと早く出てくるはずだと考えていた。

「墓地送られたのは……2ターン目の針虫の巣窟で落としたのね。それ以降、いくらでも閻属性モンスターがリリースされたタイミングはあったわ。」

なんで今？　その子は私のターンに出したって……」

記憶を探れば。もつと早い段階で出していれば楽になっただろう箇所がある。なのになぜ。

舐められているのか、ふざけているのか、やや怒気をはらみながら尋ねれば……三沢は遠い目をしたのもつかの間、今度はチラリと後ろに目をやった。

「十代、カオス・ソルジャーを倒したことは褒めてやろう……だがその勢いもここまでだ！」

俺はっ！　魔法カード、融合フュージョン・タグ識別を発動！　俺の融合デッキに存在する——青眼ブルーアイズ・アルティメットドラゴンの究極フュージョン・リザレブ竜を見せることで、フィールドに存在する開闢の騎士が同名の融合素材として使用可能になる！」

「え、待てよ……今万丈目の場には、カオス・ソルジャーとして扱われている超戦士の魂フュージョン・リザレブがいる。そしてさつき融合準備で墓地から回収した融合が手札に……まさか!？」

「そのまさかだ!!　俺は融合を発動！　カオス・ソルジャー扱いの超戦士の魂、青眼の究極龍扱いの開闢の騎士を生贄にささげ——いでよっ、究極マスターオブ・ドラゴンナイト竜騎士オ！」

教師とイエローの主席のバトルの裏側で繰り広げられているもう一つの激戦。ブルーのトップとレッドのトップがぶつかり合い会場を震えさせている。

前者が雁字搦めな計算と論理のデュエルだとするならば、こちらは互いの意地とロマンのぶつかり合い。見ごたえのあるデュエルに見るものは息をするのも忘れる。

ただでさえ万丈目が広げていたレアカードたちのオンパレード、そのトリを飾る大物がついに姿を現した。興奮しない訳がない。

「あの万丈目のカード、渡したのは……ルナ先生ですよね？」

三沢として自分のデュエル中で無ければ全力でその全貌を記憶しようと考えていた。故にわかる。彼の浪漫と意地を支えるカードたちの出どころが、自分のデッキのキーカードたちと同じであることを。

どうやって彼にカードを。そんな疑問と共に指摘すればルナはや居心地が悪いと眉を顰める。しかし否定はしなかった。彼にだけに聞こえるような声で口開く。

「……タダじゃないわよ？ 賭けたのよ彼は。自分の勝利に、私の思惑が崩れることに」

「賭けさせた、の間違いのようですね」

「えー、ひどい♥ 決めたのはメジヨっちだもん！」

目じりを伸ばし笑う彼女と、それを見て観客席で紅茶を啜るメイドを見て三沢は真相に気が付いた。彼女の思惑に万丈目はハマリ、プライドを保ったまま手を出したのだろう。

……賭けの代償がどれほどのものだとしても、あのレアカードの数々を手に出れるなら決して分は悪くない。そう考えてしまう自分もいた。

「で？ 闇黒の魔王を出さなかったのとなんの関係があんのよ？」

話逸らすんじゃないわよ。ドスを利かせ教師と思えない態度で生徒に尋ねた。

考える事数瞬、三沢は何度か万丈目たちとメイドさんを見返す。

「……俺は、このまま貴女の思惑に、カードに頼っていいのか。デッキに入れておきながら悩んでいました」

弱い自分がいる。決して目の前で小悪魔ぶるだけでは済まない彼女の過去を不意に知ってしまった自分がいる。

それが、自分たちをタダ強くするだけで本当に済むのか。奇妙な

ゴールド寮を作るだけで終わるのか。分からなかった。

だから三沢は悩んでいたと吐き出した。強いデッキを、強いデュエリストになるためには不要だと自分で理解している物が邪魔をする。

「——ルナ・ベルケット先生、貴女の過去を俺は知りました。だから、デュエルが始まった後ずっと……今の貴女を知るためにはどうすればいいか考えていたんです」

悩みがあるなら原因を取り除くべきだ。理知的に彼は行動する。ように見えて、感情が原動力だ。

「……リゼったら、おしゃべりね。結局ルナのカードを使えず悩んで追い詰められましたーって訳？ ばっかじゃない？」

だがそれこそがデュエリストらしい。運命を相手取りつつも最適解だけでは生きていけない戦士たち。

三沢の目に今、小さな覚悟が宿ったことルナは知った。それはそうと自分の過去を勝手に知って勝手に悩まれた事に対しての苛立ちをぶつけた。

「いいえ、追い詰められたのはお互いなんです！

俺は、ジャイアントウイルスをリリースし……罫カード、死のデッキ破壊ウイルスを発動!!」

それを糧に、足場にして三沢は駆け上る。

死と刻印された細菌たちが広がっていく。究極竜騎士の光に照らされたフィールドに陰を作る猛毒。

「——げげっ!? でい、デイメンション・マジックを発動! 白魔導士のピケルをリリースして手札のブリザードプリンセスを特殊召喚、そして怨念のキラードールを破壊!」

かつて猛威を振るったカードの改訂版。それでもなお自分の場を壊滅させる威力を持つと気が付いたルナは手立てを探すも苦し紛れの一発のみ。

その間にもウイルスが自軍のフィールドを埋め尽くし……王女ピケル、そしてプリンセスを飲み込み蝕んだ。

「相手フィールド、手札の攻撃力1500以上のモンスターを全て破壊、これで先生のモンスターは全滅!」

「あ、ああ……！」

突如としてがら空きになったフィールド。対する三沢の場には進化した魔王。このターンで彼女が出来ることはもはや、一つしかない。

力任せにディスクからデッキを抜き出し、一枚をつかみ取る。

「わ、私は死のデッキ破壊ウイルスの追加効果。デッキから攻撃力1500以上のモンスターを……マジシャンズ・ヴァルキリアを一体、墓地に送るわ。」

……ターンエンド！」

墓地に送ればすぐさまデッキが戻され、シャッフルされる。その途中だというのに彼女はエンドを宣言した。よほどイラついている証拠だ。

その様子を見て、三沢は自分の考えが進んでいることに小さく頷く。

「では俺のターン、ドロロー。……スタンバイフェイズ、さつき俺のターンでリリースした二体目の怨念のキラードールが戻ってきます。俺はそのままターンエンド。永続魔法エクトプラズマーの効果で怨念のキラードールをリリース。本来なら800ポイントのダメージが発生します、が」

「……死のデッキ破壊ウイルスのデメリット、発動ターンの次のターン終了時まで、相手が受ける全てのダメージは0」

「はい。それでは……ルナ先生のターンです」

言われるがままドロローをしようとしてルナは手が止まる。

フィールドに既に死のウイルスは存在しない。三沢が引いたカードは伏せられていない。手札から発動するカードの可能性もあるが微妙なところだ。

魔法カードを引くのが一番まずい。自陣の魔法使い族モンスターが消えたことで魔法族の里の圧力は自身にのしかかってきている。

しかし、状況が不味いのは三沢も同じ。ライフは依然として1100のまま。ルナが低級モンスターを二回ほどエクトプラズマーの生贄にするだけで消える命。

なにより折角の進化したディアボロスがいたとしても、闇属性の攻撃宣言を封じるエレメンタル・アブソーバーが無ければエクトプラスマーの弾にするぐらいだ。

それでも4800のライフ、簡単にはいかない。

三沢のエクトプラスマーによるバーンか、アブソーバーを除去し攻め込まれて負けるのが先か、ルナがいいカードをドロウし削り切るのが先か。

これは互いのドロウ力を、作り上げたデッキの一枚一枚が物を言う状況だ。

そこに余裕はない。

「……これで、私の今ってやつを見るつもりってワケ？」

「……はい、ご教授お願いします」

ルナが不満を現せば彼は笑った。それがやはり面白くなくて、彼女は手をドロウするデッキにかける。

黄金色の目にぎらついた、小さな小さな火が灯るのを三沢は見た。

「上つ等じゃない。このルナ・ベルケツトがどんな人間か……せいぜい理解していきなさい——ドロウ！」

空を切るドロウカードの音は、興奮高まる試合会場の歓声の中に消えた。